

ミャンマー(ビルマ)難民キャンプにおける
コミュニティ図書館事業
プロジェクト・ヒストリー

2023 年 8 月



公益社団法人

シャンティ国際ボランティア会

Shanti Volunteer Assoc.

『教育と開発 リサーチペーパー』の発行について

シャンティ国際ボランティア会は、1981年にインドシナ難民に対する救援事業をきっかけとして設立されたNGOです。アジア地域における教育・文化の分野での開発協力、国内外での人道緊急援助、草の根貿易、国際協力についての政策提言、地球市民教育を行っています。

教育は経済社会発展の手段であるだけでなく、基本的人権の一つであり、エンパワメントのプロセスでもあります。教育は一つのセクターであると同時に、農業、産業、医療、福祉、保健等の他のセクターや人間の生活のあらゆる領域に共通して必要な要素です。開発の過程における人びとの参加を保障するために、教育は不可欠です。

『教育と開発 リサーチペーパー』は、国際協力関係者を対象に、教育協力事業の改善のための議論を活発することを目的に発行するものです。当会の活動の経験から得られた、知見、アイデア、分析を提供します。

なお、各執筆者の見解は、必ずしもシャンティの公式見解ではないことをお断りいたします。

シャンティ国際ボランティア会(SVA)

目次

1. はじめに.....	1
2. ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ概要.....	2
(1) 難民キャンプ設立の経緯と歴史.....	2
(2) 難民キャンプの生活.....	3
(3) コミュニティ図書館事業について.....	4
3. 第1期 コミュニティ図書館事業の立ち上げ、開始(1999 年-2002 年).....	6
(1)形成・開始期概要.....	6
当時の難民キャンプ地図・人口(2002 年度).....	6
シャンティの活動概要と運営概要.....	7
(2)形成・開始期関係者による座談会.....	8
事業開始のきっかけ.....	8
事業形成調査の開始.....	9
事業承認までの道のり.....	9
初めての事務所開設.....	9
コミュニティ図書館の設立プロセス.....	10
事業の応援者.....	12
コミュニティ図書館が初めて開館した時.....	13
ターク県の立ち上げについて.....	14
2000 年当時、駐在を決めた理由.....	15
なぜここまで子どもたちがやってくる図書館になったか?.....	15
難民キャンプだから、図書館の理念を強調したから事業が続いたのか?.....	16
4. 第2期 コミュニティ図書館事業対象地域の拡大(2003 年-2007 年).....	17
(1)事業対象拡張期概要.....	17
当時の難民キャンプ地図・人口(2007 年度).....	17
シャンティの活動概要と運営概要.....	18
(2)事業対象拡張期関係者による座談会.....	19
事業対象拡張の経緯と新たな場所での図書館運営.....	19
キャンプ合同研修について.....	19
高齢者活動の開始.....	20
伝統文化活動の開始.....	21
図書館青年ボランティア(TYV)設立.....	22
絵本出版.....	22
当時の事務所運営.....	23
5. 第3期 定着したコミュニティ図書館事業(2008 年-2012 年).....	24
(1)定着期概要.....	24
当時の難民キャンプ地図・人口(2012 年度).....	24
シャンティの活動概要と運営概要.....	25
(2)定着期関係者による座談会.....	27
図書館活動の選択について.....	27
第三国定住が進む中でのコミュニティ図書館の運営.....	27
難民子ども文化祭.....	28

世界難民の日サッカーフェスティバル	29
絵本出版	29
当時の事務所運営	29
6. 第4期 帰還準備支援の始まり(2013 年-2019 年)	31
(1)帰還準備支援期概要	31
当時の難民キャンプ地図・人口(2019 年度)	31
シャンティの活動概要と運営概要	32
(2)帰還準備支援期関係者による座談会	34
第三国定住と本国帰還の影響の違い	34
帰還準備として開始した活動	35
ミャンマー側からの図書購入	36
学校図書室整備	36
絵本出版について	37
移行計画とその実施	38
カレン州帰還民支援との連携	38
コミュニティ図書館の役割の変化	39
当時の事務所運営	39
7. 第5期 コロナ禍、軍事クーデター以降の事業運営(2020 年以降)	41
(1)コロナ禍、軍事クーデター以降の概要	41
現在の難民キャンプの地図・人口(2023 年 6,7 月)	41
シャンティの活動概要と運営概要	43
(2) コロナ禍、軍事クーデター以降の関係者による座談会	43
コロナ禍の図書館運営	44
軍事クーデターの図書館活動への影響	45
事務所運営について	45
今求められている図書館の役割	45
8. 約 20 年の成果・課題・教訓	47
9. 参考文献	50
10. 別添	51
別添 1:事業年表	51
別添 2:図書館の室内設計	56
別添 3:「図書館の詩」ポサクレ(当時 10 歳/メラマルアン難民キャンプ在住)	60
別添 4:図書館研修内容(初期・現在)	61
別添 5:図書館建設・改装・修繕記録(2001 年～2014 年)	68
別添 6:出版絵本リスト(2001 年～2022 年)	69
別添 7:メディア掲載記事	71

1. はじめに

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会(以下、シャンティ)は、1999年2月、外務省および在タイ日本大使館によるタイ・ミャンマー国境難民キャンプの事業実施可能性調査に参加した。同年12月にシャンティ単独による事業計画立案調査を実施。主にミャンマーの少数民族であるカレン人が居住する難民キャンプを対象に2000年からコミュニティ図書館事業を開始した。以降、難民キャンプの状況や住民との協議によって支援活動を変化させ、図書館の運営を担う人々への能力強化を行い、事業を継続してきた。約20年間の図書館の利用者延べ人数は11百万人を超え、コミュニティ図書館はノンフォーマル教育施設であるだけでなく、ミャンマー難民の居場所としての役割を果たしている。

「私達がミャンマーに帰る時には図書館にも一緒にきてほしい」という難民の声から、シャンティでは難民キャンプ閉鎖まで本事業を可能な限り継続することを理事会で決めており、本事業は2023年8月現在も継続している。本書は、2020年に事業開始から20年という節目を迎えたことを受け、1999年の調査時から現在までの約20年の活動について、事業を通じた気づきを取りまとめ、現在の状況を発信する。本書では約20年を以下の5つのフェーズに分け、各フェーズでの事業の実績を通史的に記録すると共に、経験から得られた知見や教訓を提示する。もって、他の難民キャンプ状況下で今後シャンティが図書館事業を立案・実施する際に役立つことを目指す。

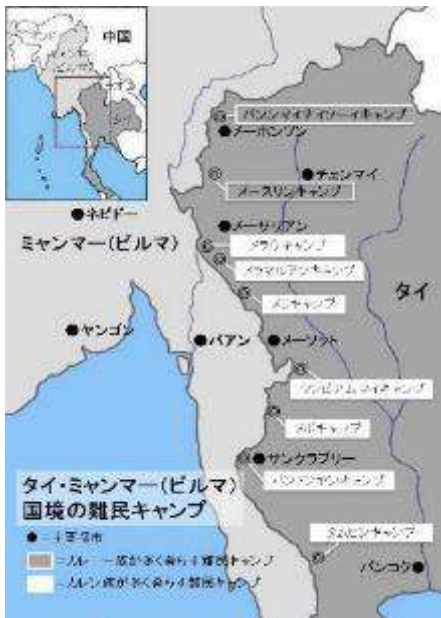
本書は以下の方法でとりまとめた。まず、本事業に関する事業報告書、評価報告書、出版物、ブログ記事等の現存するすべての文献をレビューした。次に、事業フェーズ毎に当時の事務所長、専門家、マネージャー、コーディネーター、総務担当等の事業従事者による座談会を開催し、変化する難民キャンプの状況、出会った難民の人々についてのエピソード、直面した課題、経験から得られた知見や教訓を収集した。

	名称(対象年度)
第1期	事業形成・開始(1999～2002)
第2期	事業対象拡張(2003～2007)
第3期	定着(2008～2012)
第4期	帰還準備支援(2013～2019)
第5期	コロナ禍、軍事クーデター以降(2020～)

表1: 本書におけるフェーズと対象年度

2. ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ概要

(1) 難民キャンプ設立の経緯と歴史



タイ・ミャンマー国境の難民キャンプ

タイ・ミャンマー国境には9カ所のミャンマー(ビルマ) 難民キャンプがある。本書ではその内7カ所をカレン人が多く暮らすカレン系難民キャンプ、2カ所をカレンニー人が多く暮らすカレンニー系難民キャンプと記述する(地図1)。カレン系キャンプ、カレンニー系キャンプともに少数派であるがビルマ人、アラカン人、チン人、モン人、パオ人、シャン人など多様な民族が居住している。これらの難民キャンプは1984年にタイ政府によって公式に承認され、2023年6月末時点で9つの難民キャンプの総人口は91,337人である¹。なおタイ政府は難民条約に批准していないため、難民(Refugees)ではなく、避難民(Displaced Persons)と呼んでいる。

国連難民高等弁務官事務所(The Office of the United Nations High Commissioner for Refugees:以下、UNHCR)によると、難民流出の理由は2つある。1つめは2011年まで約60年間続いたミ

ャンマー軍事政権と少数民族であるカレン人およびカレンニー人の勢力との間の武力紛争から逃れてきたこと。2つめは、軍事政権による人権弾圧(強制労働、強制移住等)から逃れてきたことである。難民キャンプ設立以降も毎年人々が逃れ、カレン民族同盟(Karen National Union:以下、KNU)の拠点であったマナプロウが1995年に陥落して以降、難民は増加し、15万人を超えることもあった。しかし、2005年から主に米国、豪、欧州諸国への第三国定住が開始した。2011年のミャンマー民主化に伴い、2012年にKNUとミャンマー政府との間で停戦合意が結ばれると、ミャンマー本国への帰還の動きが始まり、難民人口は減少した。2016年からは、タイ政府・ミャンマー政府の合意の下、UNHCRが調整に入り、難民の本国帰還プログラムが4回にわたり実施され、1,039人がミャンマー東部カレン州への帰還を果たした。また、カレン難民委員会(Karen Refugee Committee:以下、KRC)によるとUNHCRによる組織的な帰還とは別に自主的に約1万5000人が帰還した。

しかし、2021年2月ミャンマーで軍事クーデターが発生した。カレン州では国軍による大規模な空爆や地上戦が確認され、同年4月末までに7,000人がタイ側に逃れ、人道的保護を求めた。しかし、タイ軍は避難民に対して一時的な物資配布を行ったのみで、その後はミャンマー側へ

¹ UNHCR (2023年8月閲覧)<https://www.unhcr.org/th/wp-content/uploads/sites/91/2023/07/Thailand-Myanmar-Border-Refugee-Population-Overview-June-2023.pdf>

と帰還を促した。戦闘とタイ軍に挟まれ、行き場を失った多くの避難民が、タイ・ミャンマー国境周辺で長期的な避難生活を余儀なくされている。

難民に対する支援は、救命、救援、難民キャンプの維持支援を経て、最終的解決である本国帰還か、第三国定住あるいは第一庇護国での定住に至る。ミャンマー(ビルマ)難民キャンプの場合、第三国定住は 2013 年で終了し、第一庇護国であるタイは難民条約に批准しておらず、難民のタイ社会への統合を認めていないため、最終的解決は本国ミャンマーへの帰還のみとなる。しかし、新型コロナウイルス(以下、コロナ)と軍事クーデターにより 2016 年より進んでいた本国帰還のプロセスは停止し、全ての難民がいつ帰還を果たせるのかは誰にもわからない状況である。



ミャンマー(ビルマ)難民キャンプ

(2) 難民キャンプの生活

シャントの活動する 7 カ所のカレン系難民キャンプは、タイ内務省(Ministry of the Interior: 以下、MOI)の下で管理されている。難民キャンプは立入禁止区域となっており、鉄線で囲われているため、MOI の許可なく出入りすることはできない。MOI との契約により、UNHCR や国際 NGO が食料、居住、医療、教育、生計向上などの社会サービス支援を行っている。契約をした NGO は毎年予算を含む活動計画を MOI に提出し、承認を受ける必要がある。支援団体間の調整を行うため、MOI は 1974 年から国際支援機関の連合体であるタイ一時避難民サービス調整会(The Committee for Coordination of Services to Displaced Persons in Thailand: 以下、CCSDPT)を設置し、CCSDPT では定期会議やセクター別会議を通して、援助の調整と連携を図っている。キャンプの運営は、2 年に 1 度各キャンプの居住者による選挙で選出されるキャンプ委員会が担っている。各キャンプ委員会の上部組織として KRC があり、タイ政府および援助機関との窓口となっている。カレン女性組織、カレン青年組織といっ

たカレン人の住民組織(Community Based Organization:以下、CBO)も社会サービスの提供を行っている。近年は難民キャンプの長期化により、国際 NGO の支援撤退が続いており、シャンティが活動を開始した 2000 年には 20 団体あった支援団体は現在 12 団体となっている。撤退する団体が担っていた支援活動は、別団体や CBO に引き継がれるが、資金が縮小するため同規模での活動継続は困難であり、支援撤退は難民キャンプにおける教育・保健等の基礎的社会サービスの縮小を意味している。

難民の流出が始まった 1985 年頃から 1997 年まで MOI によって認められた支援は、食糧、居住、保健・衛生サービスに限られていた。この間学校教育が無い訳ではなく、支援がないまま、自主的に難民が学校を建て、教員を養成し、教材を謄写版で刷って、学校を運営してきた。1997 年に初等教育の支援が認められ、その後成人識字教育や特定分野の職業訓練など教育援助の中の他の支援も認められた。現在、難民キャンプの教育は、NGO による支援を得ながら、カレン難民委員会教育部会(Karen Refugee Committee Education Entity:以下、KRCEE)が担い、保育所、小・中・高等学校、ポスト高等学校(短期大学)、障害児向けの特別支援学校、職業訓練校といった教育施設がある。シャンティはキャンプの中で唯一のノンフォーマル教育施設であるコミュニティ図書館を支援している。キャンプの内に教育の場はあるものの、学校卒業後の就業の機会は限られており、キャンプの外に出ることは許されていないことから、キャンプ外での賃金労働はできない。最低限の生活は支援によってまかなえるものの、将来が見えないことから、多くの人々が不安を抱え、問題行動、薬物依存、自殺のケースが増加している。

(3) コミュニティ図書館事業について

1999 年にシャンティが実施したミャンマー難民支援事業形成調査によって、満たされていない支援ニーズが確認された。1 つは、文化・余暇の機会が不足していること。2 つめは、キャンプの子ども、青年(正確なデータはない)が、少なからず心理的な傷(トラウマ)を負っているということである。子どもに自由に絵を描かせると、「父の死」や「紛争」、「ジャングルでの生活」といった悲惨な出来事の体験を絵に描く子どもが多い。そこで、シャンティはこれまでのカンボジアやラオスの難民キャンプでの活動の経験から、図書館の活動を支援することを決めた。これまでの経験から、子どもの発達のためには、食べ物や住居だけでなく、本やおはなしも必要であると考えているためである。本やおはなしは、心の栄養であり、これらには子どもの想像力を高め、子どもたちが協力する態度や価値を高めるだけでなく、子どもの心理的な傷を癒す力もあるとも考えている。

2023 年現在、コミュニティ図書館は図書館委員会の下で運営され、各館 2 名の常駐図書館員がおり、週に 5 日開館している。図書館内部は子どもの部屋、大人の部屋に分かれ、本棚にはカレン人の母語であるカレン語や帰還後の言語であるビルマ語で書かれた図書が配架されている。子ども向けの絵本から、青年向けの学習参考書、大人向けの新聞、雑誌、一般教養書、小説など、蔵書数は 2022 年末時点で 198,598 冊(15 館合計)である。13 歳以上の利用者に対して図書の貸し出しを実施しており、保育所、小学生の子どもたち向けには、図書館員によるおはなし会を毎日開催している。おはなし会では、絵本や紙芝居、パネルシアターなどを利用したおはなし

しの実施に加え、ゲームやお絵かき、折り紙などの活動も行っている。

20年に渡る難民の教育支援への取り組みが認められ、本事業は2023年に第11回オツケンデン国際賞(難民・避難民のための事業部門)を受賞した。審査員からは、本事業が世界で最も困難な場所の1つとも言える場所で機能を果たしていること、15館のコミュニティ図書館が難民の人々によって自主管理されていることに特に評価を受けた。また、本事業は主体的な学び、アイデンティティの形成、そして難民キャンプ以外の世界について多文化的視点を育むために非常に重要であると評価された。



コミュニティ図書館外観



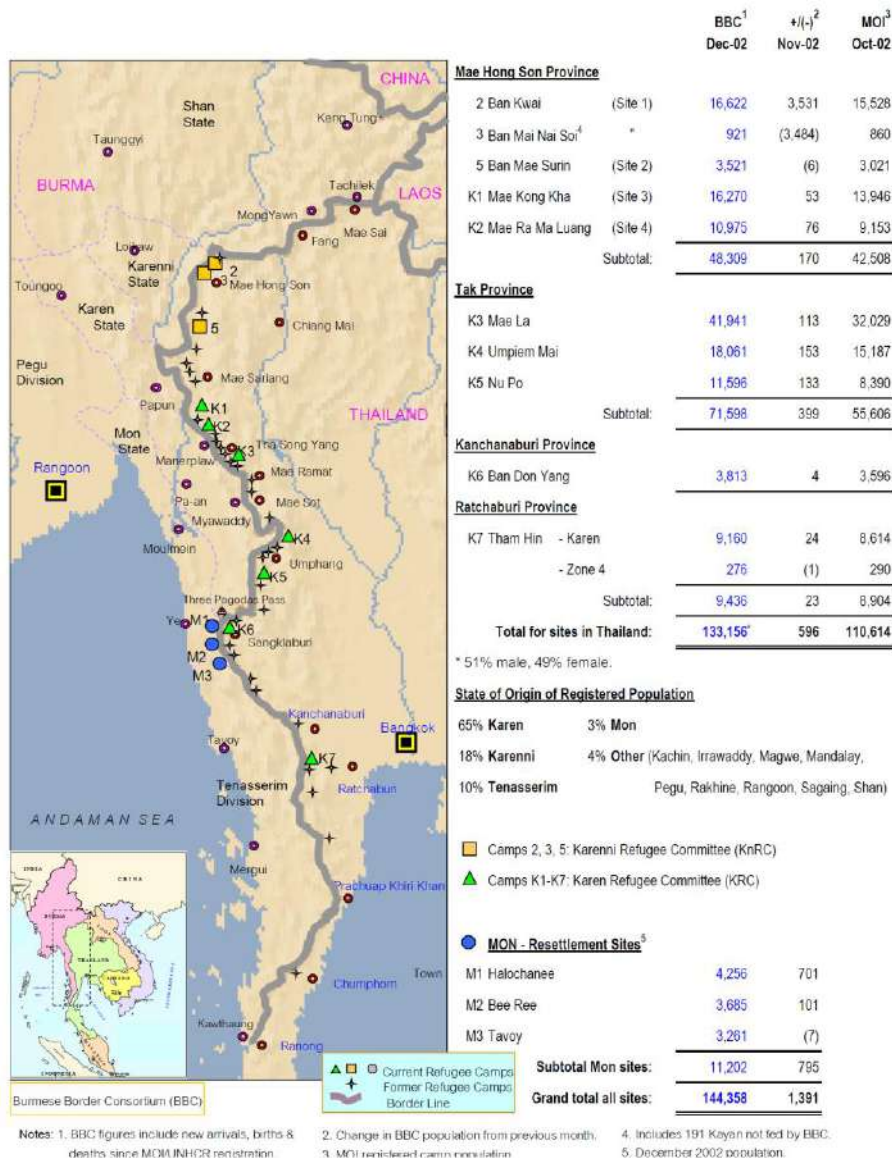
コミュニティ図書館に通う青年

3. 第1期 コミュニティ図書館事業の立ち上げ、開始(1999年-2002年)

(1) 形成・開始期概要

当時の難民キャンプ地図・人口(2002年度)²

BURMESE BORDER REFUGEE SITES WITH POPULATION FIGURES - December 2002



注釈翻訳: 1. BBC(the Burmese Boeder Consortium: 現在の The Border Consortium)の計測は MOI/UNHCR 登録後の避難民、新生児、死者を含む 2.前月からの変化 3.MOI の登録数 4.食料支援をしていない 191を含む 5.2002年12月時点

² The Border consortium (2023年4月閲覧)

<https://www.theborderconsortium.org/resources/key-resources/camp-population/>

シャンティの活動概要と運営概要

年度		特記事項
1999	活動面	支援実施可能性調査に参加。支援計画立案調査の実施
2000	活動面	メコンカ、メラマルアンキャンプでの活動開始。図書館委員会の設立。
	運営面	メーサリアン事務所を開設、ナショナルスタッフ ³ 3名の雇用
	支援者	UNHCR、民間寄付
2001	活動面	6館(メコンカ3館、メラマルアン3館)の図書館建設。開館前に図書館活動・基礎ワークショップ、開館後に現職研修実施。絵本出版開始。 ミャンマー(ビルマ)難民に冬物衣類を贈る運動を開始し、衣類が難民キャンプに到着
	運営面	メーソット事務所を開設。所長交代。
	支援者	UNHCR、民間寄付
2002	活動面	6館の図書館運営支援。10館(ヌポ2館、ウンピラム3館、メラ5館)の図書館建設。開館前に図書館活動・基礎ワークショップ、開館後に現職研修実施。突然の洪水がメラウ(旧名:メコンカ)キャンプを襲い、25名もの命が奪われ、図書館1館も流されてしまった。その後メラウキャンプが設立され、住民は移転した。 ミャンマー(ビルマ)難民に冬物衣類を贈る運動で16万着以上の衣類が難民キャンプに到着
	運営面	ナショナルスタッフ15名雇用。図書館事業スタッフ講習実施。
	支援者	UNHCR、民間寄付

表 2:形成・開始期概要

2000年9月から、5カ所の主にカレン人が居住する難民キャンプで図書館活動の支援を行うことをシャンティの理事会は決定した。活動内容としては、①図書館委員会の設立、②図書館の建設、③図書館員育成、④タイや日本で出版された絵本にビルマ語・カレン語の訳をつけた絵本の供与、⑤絵本出版、⑥図書館から離れたところに住んでいる子どものために保育園や学校に図書箱を巡回して貸し出すアウトリーチサービス、⑦キャンプ周辺の学校へのタイ語の図書の供与と図書館活動についての教員研修である。カレン系難民キャンプは既にイエズス会難民奉仕団(Jesuit Refugee Service:以下JRS)による学校図書館活動が行われていたため、ニーズの高さからカレン系難民キャンプを対象とすることになった。運営面では、タイ・チェンマイから車で約3時間のメーサリアンに事務所を設け、メーサリアン周辺の2つのキャンプ(当時のメコンカ、メラマルアン)で活動することが決まった。これらのキャンプはアクセスが悪く、教育分野を含めて最も支援が行われてこなかったキャンプであったため、最初の事業対象地とした。その後、メーソ

³ シャンティ海外事務所で作採用した現地職員

ットに事務所を設置し、メーソット周辺の 3 つのキャンプ(ヌボ、ウンピナム、メラ)を対象に拡大していくことにした。

活動を進めていく上で配慮した点は、支援の少ないキャンプを優先すること、シャンティはあくまで外部団体として、難民が図書館を運営できるよう能力強化をすること、少数派の人々に配慮することであった。キャンプには人口の 9 割を占めるカレン人以外に、ムスリムやビルマ人などの少数民族も暮らしており、その多くがビルマ語は分かるが、カレン語はわからない。またミャンマーへの帰還後は、生活や仕事でビルマ語の能力が必要である。そこで供与する図書はカレン語とビルマ語の両言語とすることにした。

(2) 形成・開始期関係者による座談会

参加者(当時の役職)

- 八木沢克昌(タイ事務所長)
- 三宅隆史(ビルマ難民キャンプ支援事務所所長)
- 渡邊有理子(図書館専門家)
- 中原亜紀(タイ事務所調整員、後にビルマ難民キャンプ支援事業事務所所長)
- セイラー(アシスタントコーディネーター、ターク県立ち上げのトピックのみ参加)

事業開始のきっかけ

当時、米国政府(クリントン政権)と日本政府の間で、人類共通の課題に協力して取り組むための「日米コモンアジェンダ」という協力枠組みが合意された。その中に難民支援が含まれており、外務省総合外交政策局難民支援室よりアジア教育福祉財団難民事業本部を通じて、各 NGO に対して難民支援調査への参加呼びかけがあった。1988 年にミャンマーの軍事政権下での民主化運動に伴い、タイ側に難民が流出したことを受け、シャンティは食料支援をタイ側 NGO と協働で実施した経験があった。また、カンボジア、ラオスでの難民支援の経験を活かしたいという考えから、ミャンマー(ビルマ)難民キャンプでの図書館事業の立案を検討したいと、シャンティは難民事業本部に関心表明を提出した。

シャンティは活動当初から「シャンティは底辺に蠢く存在であり、最も困難な立場にいる人と共にあるべきだ」という信念を持っており、当時困難な状態にあったのはミャンマー難民であった。「そこに関われないシャンティというのはいり得ない」という声が、創設者である有馬実成師から上がった。

難民事業本部、外務省緊急人道支援室、日本大使館(政務担当)、アメリカ大使館(移民・難民担当)と共にメコンキャンプとカレンニー系の一つのキャンプで事業発掘調査を行った。当時、日本政府関係者がミャンマー(ビルマ)難民キャンプに入ったことが初めてだったため、キャンプ委員会からは手厚い歓迎を受けた。また、八木沢がタイ語で『おおきなかぶ』の読み聞かせを行い、子どもたちが大喜びで集まる様子を見て、大使館の担当者からは「これはすごい」と声が上がり、読み聞かせの力を感じて頂いた。

体調不良の中で難民キャンプの調査に入った八木沢所長は、「読み聞かせの力は見せるしかない。見てもらわないとわかってもらえない」という思いで読み聞かせを行った。また、カンボジア難民キャンプでの経験を直接話して伝えることで外務省と大使館からの信頼を得ることができた。その後、外務省からの推薦で UNHCR から資金が出ることが決まった。

事業形成調査の開始

発掘調査以降、シャンティ独自で形成調査を 2 回実施した。調査対象はメーサリアン周辺の 2 つのキャンプ(メコンカ、メラマルアン)とメーソット周辺の 2 つのキャンプ(メラ、ウンピナム)とした。形成調査の際は難民キャンプに入るキャンプパス(在外公館や国際機関が MOI に申請できる難民キャンプへの入場許可)を自分達で取得する必要がある、カレン女性組織 (Karen Women's Organization: 以下、KWO)にサポートをしてもらった。調査の結果から、カレン人が主に暮らすキャンプは全てカバーすること、最もアクセスが悪く最も支援が不足している所(メーホンソン県、メーサリアン県にあるキャンプ)から事業を開始し、翌年からターク県の支援を開始する 3 カ年計画を立てた。メラキャンプは当時最もアクセスの良い難民キャンプと言われており、人口も多いことから支援の量は多かった。カンチャナブuri 県、ラチャブuri 県にあるキャンプに関しては、3 カ年計画では 5 カ所以上の支援は団体の力量として難しいとなり、当時は支援対象外とした。

事業承認までの道のり

MOI が難民キャンプでの教育活動を許可し始めたのは 1999 年からだった。それまでは医療、居住、食料のみが許可され、教育支援は認められていなかった。1999 年の初め、図書館事業の支援をしたいとまずは CCSDPT に申請して承認をもらう必要があったが、事業への理解に時間がかかった。例えば、当時ヌポキャンプには住民が設置していた図書コーナーがあったものの、図書館とは呼べない状態であったため、図書館はないと申請書に書いたが、図書館はあるだろうと指摘を受けた。その後は調査を重ね、CCSDPT の会合に参加し、3 回目の会合参加で承認をもらうことができた。その後は日本大使館のサポートもあり、MOI から事業承認がなされ、UNHCR への申請書を作成し、UNHCR、MOI、シャンティの三者合意書を結ぶことができた。

初めての事務所開設

カンボジア国境のタイのスリン県の出身のシーカーアジア財団のティラポンさん(当時事務局次長)に事務所立ち上げ、職員採用をサポート頂いた。新規採用したスタッフは、一緒に働いてみないとわからないことも多く、入職してすぐに辞めてもらった人もいた。一方、活動開始当初からのスタッフでアシスタントコーディネーターとして入職したセイラーは 2023 年現在、副所長となっている。彼女はキャンプの教員組織のスタッフの紹介によってシャンティのスタッフとなってくれ、これはシャンティの応援者が難民キャンプ内外にできたことによる縁であった。

コミュニティ図書館の設立プロセス

①図書館委員会の設立

キャンプ委員会をお願いをして、ジェンダーへの配慮の下、多様なグループから図書館委員会を選出してもらった。最初の図書館委員会には、教育委員会、女性グループ、青年グループ、セクションリーダー、教員といった人たちが関わってくれた。但し、カレン人で英語が使える、ある程度の教育を受けているという人材が限られていることもあり、委員会メンバーは何かの活動と掛け持ちをしているため、忙しくしていた。

図書館委員会の大きな役割は図書館の建設や図書館員の選出であったが、今思うと委員会の役割を重視し、彼らの能力強化により多くの時間をかければよかったと思う。委員会の立ち上げ前に、どんな図書館にしたいかと話し合った際に、人権を守る図書館にしたいという話が印象的だった。

図書館委員会には、シャンティがどんな図書館にしたいと思っているかを共有した。3つの柱として、①母語の本(カレン)で提供する図書館にすること、②無料の利用にすること、③カレンの文化を継承する空間にすることだった。いつも懸念を持たれるのは②の無料の利用だった。カレンの人たちは本を貴重なものと思っており、紛失を心配していた。また、ミャンマー側の図書館では利用者から利用料金を取って、そのお金で本を購入したり、本の修繕をしていたりしたということもあり、無料で運営できるのかという心配をされた。キャンプに暮らすすべての人が利用するため、日本の公共図書館同様に無料で提供したいということを伝え、紛失よりも無料の原則を貫きたいと説明した。

②図書館の設計

カンボジア難民キャンプの図書館の設計図を確認したが、無かった。記録を残すことの大切さを感じた一方で、カレンの伝統的家屋を参考にすべきで、設計図があっても役に立たないだろうとの助言もあった。難民の人たちが自分で建てることのできる建物にしようとカレンの伝統的な高床式の図書館になった。

図書館委員会との会議の中で、図書館の設計は渡邊専門家が担うことになった。試行錯誤の上、最終的には9m×7mの建物で周りに1m幅のベランダを付けることにした。館内は児童室、青年以上の図書室、図書館員の部屋の3室を設けた。児童室は開館当初絵本が少なく、貸出をしない予定であったため、大勢の子ども達に読み聞かせができるよう、もっとも広いスペースにした(別添2)。また、児童室内に柱を立てると読み聞かせがさえぎられてしまうため、柱は四隅だけにし、オープンスペースになるよう依頼した。

入口には階段をつけたが、キャンプ内には地雷の被害で足を失くし、松葉杖を使用している人たちもいるため、図書館委員会には高床式ではなくスロープのまま入れるようにしてはどうかと提案した。しかし、雨季の時期を考慮すると、キャンプ内の他の建築物と同様に、高床式は必然のことだった。エントランスの扉は両扉で広く開くようにした。難民キャンプでは電気がなく、他のNGOから聞き取りを参考に、屋根にスカイライトというプラスチックの板を6枚取り付け、明り取

りにした。

1年目の建設の問題点として、図書館員の研修で来られた国際識字文化センター(ICLC)の田島伸二氏から、館内の導線が大人の心理を考えていないのでは、との指摘を受けた。入口から手前に児童室があり、その奥に青年以上の図書室があるため、読み聞かせをしている際、大人たちは横切らなければ奥に行くことができない。このためメコンカ、メラマルアンの6館以降は、その助言に沿って、館内の構造を変更した(別添 2)。また、ベランダに関しては、開館後に図書館員から複数の問題点が指摘された。①タイ軍兵士が昼寝をする、②犬が入り込む、③大人たちのサッカー観戦所となる、④雨が降った時の雨よけ場にされる、などである。このためメコンカ、メラマルアン以降の図書館にはベランダは取り付けしていない。

館内での読書環境については、カレン人の生活様式に合わせ、椅子や机を使うより、床に直接座って読む方が馴染むとの意見から、床で読む形を採用した。折り紙などの作業用に、各館に折り畳み式のテーブルを数台提供した。

児童室の本棚は、小学生の子どもの目線に合わせ、上段は本の表紙が見えるよう面展型にデザインした(別添 2)。資材である竹とユーカリが集まってから、建物自体の建設には1館あたり 8人がかり、約 2週間で完成した。

メコンカキャンプは自然災害が多く、のちに図書館 1 館が洪水により流れてしまった。災害による被害があると、親が心配し子どもを図書館に行かせないことがあった。メコンカキャンプはその後メラウキャンプに場所を移転し、図書館も再建されたものの、自然災害の影響は引き続きあった。



メコンカ第二図書館外観



メラマルアン第一図書館外観

③図書の選書

絵本は 50 タイトル×4 冊(1 冊ビルマ語、3 冊カレン語)の合計 200 冊から始まった。渡邊専門家がタイ渡航前に日本で 50 タイトルを選出した。選書のポイントとしては①世界中の子どもたちに読み継がれてきた絵本、②異文化を理解する絵本、③家族のきずなや平和の大切さを表現した絵本、④体のしくみや保健衛生についての絵本、⑤環境保護についての絵本であった。④と⑤

については難民キャンプからの要望だった。

まず翻訳を進めるため 50 タイトルの内、既にタイ語の翻訳がある 19 タイトルはタイで購入し、31 タイトルは日本で英語版を購入した。翻訳を KWO に依頼をしたが、絵本によってはカレン語の語彙で表現できないものが多すぎる絵本があると指摘を受け、差し替える必要がある絵本があった。また、絵本の面白さが子どもに伝わる言葉で翻訳するということは難しいため、翻訳後はキャンプ内の小学校の教員に読んでもらい、子どもたちが理解できる言葉になっているか確認した。翻訳後、開館前に図書館員に選ばれたキャンプ内の図書館員が絵本の訳文の貼り付けを行い、次年度以降は日本から訳文を張り付けた絵本が届けられるようになった。

『スーホの白い馬』や『おさるのジョージ』の人气が高く、難民キャンプにはない環境が登場する絵本であっても子どもたちが想像を働かせて、楽しんでることに驚いた。(三宅)

大人の本は、メーサリアンの教会からカレン語の本や雑誌を入手できたが、聖書の解説が多かった。ビルマ語の本はメーソットの本屋から様々な分野を購入でき、ミャンマーには読書文化があることを実感した。しかし政治や宗教に関する成人図書(聖書の解説であれば可)は図書館に入れてはいけないと MOI からは言われていた。

④図書館員の養成

基本的な研修として、開館前に 3 日間の図書館員養成研修を実施した。児童図書館員としてどういったことを身に着けるべきかという理論と実践を組み込んだ。図書館開館後も現職研修という形で定期的に研修を行った。その中で渡辺専門家は、活動の継続性を意識した。例えば、手作りの紙芝居制作ワークショップでは、原本をカラーコピーして全図書館に配布することも考えられたが、NGO が撤退した後は活動が途絶えてしまうため、オリジナル作品を事務所で白黒コピーし、絵具で色をつけるという形で行い、配布していた。

また研修では、図書館のイメージが無い人たちにどのように図書館や児童図書館活動について伝えればいいか、最初の研修前は難しかった(渡辺専門家)。1 館目が開館した後は、具体的なイメージができたこと、難民キャンプでも子どもたちは読み聞かせを楽しんでくれたことで、自信を持って次の研修を行うことができるようになった。研修時は日本語から英語、英語からカレン語と 2 段階通訳だったため、初回の研修時は内容がどのくらい図書館員に伝わっているのかよく分からなかった。しかし実際に活動が始まり、図書館員の仕事を見ていく中で、ある程度研修内容を理解できていると手ごたえを感じることができた。

図書館員になる人も図書館は“静かな場所”だという印象を持っている人が多く、大きな声を出して絵本を読むということに最初は戸惑っていた。開館した後に、子どもたちに繰り返し絵本を読む中で次第に慣れていったようだ。

事業の応援者

最初の訪問者は野村耕健氏(SVA 代議員)だった。カンボジア難民キャンプ時代に所長を経験され、本がお好きな方で、難民キャンプへの思い入れも強かった。現場経験者だけに、現場の気

持ちをよくわかっている人だった。資金源が限られている中での事業継続であったため、総会で本事業終了はよく議論にあがった。野村氏は、「それはダメだ。他の事業は閉めても、この事業を続けるべきだ」と強く言うてくださった。その時は泣きそうになるくらい嬉しかった(三宅所長)。

一番初めの訪問は図書館が完成する直前の訪問であり、キャンプパスは取得できず、近くの村までの訪問となった。その後も続いてメーソットに訪問していただき、ご支援と共に駐在している日本人にカンボジア難民キャンプ時代の話語ってくださった。継続できるように事務局にも伝えるから、安心してくれと言っていただき、心強かった。それ以外の方達も徐々に訪問して下さるようになり、支援の輪が広がったように感じた。亡くなるまでご縁が続いたことに感謝をしている。

コミュニティ図書館が初めて開館した時

最初が開館したのはメコンカの図書館だった。開館式の様子は NHK ニュース「おはよう日本」でも放送された。メラマルアンの時は開館直後、ある母親から自分が子どもの時、ミャンマーでこういった図書館は無かったが自分の子どもにこういった図書館を作ってくれてありがとうと言葉があった。

開館式を行った後、大勢の子どもたちが一気に図書館に入ってくる様子はいまだに忘れられない。子どもたちが本を手にとって、夢中で声に出しながら読む様子を見て、「これから毎日図書館があるんだよ」という思いを抱かずにはいられなかった。開館後図書館に行った時に、図書館ができたことのお礼として、子どもたちが突然輪になって歌を歌ってくれた。とても嬉しい贈り物だった。大人たちもこういった施設ができることは嬉しいと話してくれ、子どもたちに活気が満ちると、青年たち、大人たち、地域全体にも良い影響をもたらすのだと感じた。

子どもたちは、朝、昼、晩と一日何度も図書館にやってきて、絵本を読むことに夢中だったため、教育委員会から図書館委員会に対して「学校の試験前は閉館してほしい」という要望が来た。話し合いによって、試験 1 週間前は閉館することになったが、子どもたちがどれほど図書館で本を読むことを楽しんでいるのか、ということの表れでもあった。

しかし、同じキャンプ内の図書館でも、図書館員の子どもへの接し方に違いができてきたという報告も受けた。「自分でもう読めるでしょう」と図書館員が絵本を読んでもくれない図書館の場合、多少遠くても絵本を読んでもくれる図書館員のいる別の図書館へ行く子どもたちがいるという。同じ設計の建物、同じ絵本を配布しても、そこで働く「人」によって活動内容が左右されることを改めて感じた。渡辺専門家が帰国する際には他の NGO の人から「シャントの図書館活動はすごい、国境なき図書館として他の国にも広めるべき」だとの言葉をもらった。

KWO にもお世話になり、キャンプのことをたくさん教えてくれた。シャントの活動をいいと思ってくれる人がキャンプ内にたくさんできたことは良かった。



メコンカ第二図書館開館セレモニー



メラマルアン第三図書館開館日

ターク県の立ち上げについて

開館の日に子どもが多く集まりすぎて、竹の床が崩れるのではと心配するほどの光景は感動的だった。子どもたちは図書館を楽しみに待っていてくれ、キャンプに行くたくさんの人から感謝の気持ちを伝えてもらえた。ただし、ヌポキャンプの図書館委員会は子どもへの活動の意義を理解してもらえず、関係構築が難しかった。その結果開館式を運営委員の委員長と副委員長にボイコットされてしまった。その後も議論は続け、最終的に折り合いがついた。すべての図書館が上手く開館したという訳ではなかった。

メコンカ、メラマルアンと比較すると、ターク県内のキャンプは立地が良く、多くの NGO が進出しており、状況が異なっていた。キャンプからの期待値が高く、なぜこの支援を始めることにしたか、どのような支援を実施したいかといった事業の詳細を説明する必要があった。その際に、メコンカ、メラマルアンの経験を基にして、具体的に事業の説明ができたことは良かった。ターク県内のキャンプに対応するために、新しいスタッフを雇う必要があり、渡邊専門家の技術的支援があったものの、短期間でスタッフへの研修を実施することは挑戦であった。経験のあるメーホンソンスタッフにとって、離れたメーソットにいる新しいスタッフと一緒に働くことは最初難しかった。

セイラーにとって、事業を始める前の大きな挑戦は、キャンプ関係者に図書館について理解してもらうことであった。但し、既に他のキャンプでの活動経験があるということは強みでもあり、どのようにコミュニケーションを取ればよいかを他のナショナルスタッフも理解していた。

難民の人達は綺麗で多くの本が配架されている図書館を見ることが初めてで、初めて図書館に入る時はとても興奮していた。図書館で行う子どもたちへの活動も新しいものだった。というのも、キャンプで子どもたちが楽しめる活動というのは、それまで提供されていなかったからだ。

特に大人は文字が読めないことを心配していた。しかし、次第に図書館は皆に開かれていて、文字が読めなくても利用できるということを理解し始めた。読み聞かせなどの子ども向けの活動に先生や大人も参加することも多かった。

2000 年当時、駐在を決めた理由

【八木沢】最初に事業を始めた二つの難民キャンプは、最もアクセスが悪く、外国人が駐在するには大変な場所であった。なぜメーサリアンへの駐在を決めたのか。

【三宅】支援が少ないところとは、最も支援が必要とされていることを意味するので、当然そこから始めるべきだと考えた。支援が少ないことの理由はアクセスが悪いからで、これは仕方がないことだった。キャンプに行くことは大変であるが、毎日通う訳ではないので、大丈夫だろうと思った。

【渡邊】タイに行ったことが無く、どういった環境なのかを全く知らずに行った。もともと車酔いが酷く、移動時の山道や急カーブの連続は最後まで慣れなかった。一方、日本とは違う異文化での生活にはあまりストレスを感じず、新しい世界や知らない世界が広がることの喜びの方が強かった。しかし、言葉の面では三宅、中原両所長に公私にわたるサポートが大きい。図書館が開館後は子どもたち、図書館員、委員会の人たちなど、関わる人たちが増え、もっと力になりたいと思うようになった。難民キャンプでの3年間の経験は、図書館の原点を考える機会ともなり、帰国後の学校図書館でも大いに活かされている。

なぜここまで子どもたちがやってくる図書館になったか？

【渡邊】やはり絵本の惹きつける力が大きかった。子どもたちは本に色がついているということにまず驚いていた。学校で出会う友達とはまた別に、本の中の友達と出会う楽しさを感じてくれたのだろう。図書館に行くと図書館員がたくさん絵本を読んでくれて、多くのおはなしの世界と子どもたちとを繋いでくれた。図書館員が児童図書館活動を理解して、おはなしを語っているからこそ生み出された環境だと思う。

【渡邊】本の紛失は図書館員会からも心配されていたが、最初に紛失したのは辞書だった。青年たちは夜間に辞書を盗むほど勉強をしたいのかと驚いた。そのため、辞書は図書館員の部屋に移動し、直接貸し出しをするようにした。

【渡邊】カレンの人たちにとっては、本は貴重なもので、図書館は知識のある人たちのための場所という思いが強く、活動当初は「字の読めない人は来るな」という識字者が非識字者にたいしてトラブルがあった。このため各図書館には国際連合教育科学文化機関(United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization:以下、UNESCO)の公共図書館宣言のポスターを張った⁴。すべての人に図書館は平等に開かれているということを研修でも伝えるようにした。

【三宅】UNESCO 公共図書館宣言は大人の部屋にも掲示した。無料の原則などが記されている。こういった図書館の理念は強調して研修で伝えていた。

⁴ 日本図書館協会(2023 年 4 月閲覧) <https://www.jla.or.jp/library/gudeline/tabid/237/Default.aspx>

難民キャンプだから、図書館の理念を強調したから事業が続いたのか？

【三宅】両方であるが、環境が違うということは大きい。電気がなく、家に本はなくやることがない。図書館に行けば楽しいことがあるので行きたいとなる。図書館ができたという詩(別添 3)にすべてが語られている。難民の子どもたちの大切な居場所を作ってきたのだと思う。

【渡邊】外の世界を知らない子どもにとっては、図書館で様々な本から知る世界は今までに知らなかった世界になる。図書館は外と中をつなぐパイプのような役割を果たし、図書館の理念を理解してくれた図書館員の存在は大きい。

【三宅】渡邊さんの人材育成の気合の入れ方はすごい。図書館員としても知識・スキルももちろんだが、情熱があった。その情熱がスタッフに伝わり、キャンプの図書館員にも共鳴した。(別添 4)。

【三宅】今後も、シャンティは世界中の難民のキャンプでコミュニティ図書館を始めるべきだと思う。どのキャンプでのニーズは大ありのはずだし、それはどの NGO も国連もできないことだ。



図書館研修の様子



メコンカキャンプの入り口にて(三宅所長、渡邊専門家、中原調整員)

4. 第2期 コミュニティ図書館事業対象地域の拡大(2003年-2007年)

(1) 事業対象拡張期概要

当時の難民キャンプ地図・人口(2007年度)²



注釈翻訳: 1. TBBC(Thailand Burma Border Consortium: 現在の The Border Consortium)の計測は難民登録の有無に関わらず、キャンプにいる人すべてを含む。永久に又は一時的にキャンプを離れている人は除外される 2. UNHCR の計測は登録難民、PAB(難民登録のシステム)で保留になっている人、学生を含んでいるが、新規でキャンプに到着した人は含まれていない 3. MRDC(Myanmar Resilience Development Centre)計測の2007年人口

シャンティの活動概要と運営概要

年度		特記事項
2003	活動面	16 館の図書館運営支援。2 館(メラマルアン 1 館、バンドンヤン 1 館)の図書館建設。5 つのキャンプ合同研修実施。 ミャンマー(ビルマ)難民に冬物衣類を贈る運動により、衣類が難民キャンプに到着(本運動はこの年で終了)。
	運営面	カンチャナブリ事務所開設。図書館事業スタッフ講習実施。
	支援者	UNHCR、民間寄付
2004	活動面	メコンカキャンプがメラウキャンプに移転。18 館の図書館運営支援。3 館(ウンピナム 1 館、タムヒン 2 館)の図書館建設。キャンプ合同研修実施。
	支援者	UNHCR、民間寄付
2005	活動面	21 館の図書館運営支援。メラキャンプ 1 館の図書館建設。キャラバン公演(人形劇)、高齢者活動、伝統文化活動開始。キャンプ合同研修実施。
	運営面	図書館事業スタッフ講習実施。
	支援者	UNHCR、民間寄付
2006	活動面	22 館の図書館運営支援。3 館(メラウ 1 館、メラマルアン 1 館、バンドンヤン 1 館)の図書館建設。図書館青年ボランティア(Toshokan Youth Volunteer, 以下 TYV)の設立。キャンプ合同研修、図書館員現職研修、TYV 研修、第 1 回図書館委員会研修、第 1 回作家・イラストレーター養成研修実施
	支援者	UNHCR、民間寄付
2007	活動面	25 館の図書館運営支援。恒久資材を使った図書館の拡張・改築の開始。母親対象ワークショップ実施。TYV 研修、伝統文化講師研修、キャンプ合同研修、図書館員現職研修、移動図書箱研修、作家・イラストレーター養成研修実施。
	運営面	所長交代。ナショナルスタッフ 25 名雇用
	支援者	UNHCR、民間寄付

表 3:事業対象拡張期概要

UNHCR からの要望もあり、カンチャナブリ、ラチャブリ地域にあるバンドンヤン、タムヒンキャンプへ活動を広げることが決定した。CCSDPT 等との会議では、自宅に引きこもりがちな年配者のこと、若者たちの非行の問題や青年たちの課外活動の不足が課題として挙がるようになった。そこで、地域に根差した図書館を目指すため、既に活動を開始している 5 カ所のキャンプでは、地域の様々な課題に寄り添う取り組みを始めた。母の日や子どもの日に合わせたイベントの開催、伝統文化活動と高齢者活動が始まった。高齢者活動によって集められたカレン族の民話や伝統的な詩は、シャンティの絵本出版にも使用された。

同時に各図書館の能力強化も行われ、図書館員の難民キャンプ外への移動許可申請を続け、2003年に5カ所のキャンプの図書館員が参加する合同研修を始めて開催できた。2006年からは図書館活動のサポートを担うTYVを組織し、学校を卒業した人や学校に通っていない人など、多くの若者が活動に参加を始めた。シャンティがTYVへ読み聞かせや歌、人形劇の上演など、図書館活動スキル習得のための研修を行った後、TYVは図書館内に留まらず、コミュニティに向き、図書館サービスや活動について認知度を高めるようになった。

また、難民キャンプは一時的な避難場所であるという考えから、建物の建築資材は基本的に竹やユーカリ、チャークという巨大な葉などに限られていたが、2006年よりMOIの方針が変わり建物の1部にコンクリートなどの恒久的資材を使用することが許可された。コミュニティ図書館でも予算に合わせて恒久資材を活用し、建て直しが始まった(別添5)。

(2)事業対象拡張期関係者による座談会

参加者(当時の役職)

- 中原亜紀(ビルマ難民キャンプ支援事業事務所所長)
- セイラー(フィールドコーディネーター)
- エッソ(プロジェクトスタッフ)
- ウェン(総務)

事業対象拡張の経緯と新たな場所での図書館運営

資金提供元であるUNHCRからバンドンヤン、タムヒンもカレン系難民キャンプであり、事業をその2キャンプへ拡張できないかと提案があった。事業資金の調達は課題であり、対象キャンプを拡張した場合はUNHCRから継続して資金を得られるということと、当時の活動状況から拡張対応は可能と判断した。

図書館の場所の選定に関しては、他のキャンプと同様に、キャンプ委員会と図書館委員会と共に、子どもが通いやすい場所かどうかなど候補地の状態を確認した。各キャンプに同じ内容の研修を実施したため、図書館活動に差はないが、人材の違いはあった。図書館活動は人材に左右され、図書館員の中には最初は子どもたちの活動に全く自信を持ってないという人もいた。

キャンプ合同研修について

初めてのキャンプ合同研修はメーソット近郊で行われ、自治労大阪様と渡邊専門家が講師となり実現できた。活動を始めたばかりの時の研修であったため、図書館員の技術の向上、役割や責任の理解、子どもたちとの関わり方を主に学ぶものであった。時間をかけて図書館員がキャンプを出て研修に参加する必要性をMOIに説明し、許可が下りたことで実施することができた。但し、メラマルアンキャンプのみ許可が下りず、第一回目の研修には参加することができなかった。この研修は、ナショナルスタッフにとっても日本の専門家から直接指導を受け、技術を磨く良い機会であった。

多くの図書館員が会場に集まった時、全員初めてキャンプの外に出たことによる興奮でいっぱいだったのを覚えている。どうやって電気を付けるのか、エアコンを付けるのかといったことから図書館員に教えた。初めての長距離移動で車酔いをしてしまう人もいた(セイラー、ウェン)。

第一回目の研修は、図書館委員会からの理解が少ないヌポキャンプの図書館員に他の図書館員との出会いでモチベーションを持ってもらうこと、図書館員以外にキャンプ委員会にも図書館の日々の活動について理解してことを目的にしていた。また、渡邊専門家の帰国前のタイミングでもあり、活動の総まとめという意味も持たせていた。合同研修はその後、メーソットから各キャンプへと会場を変え、合計 7 回実施した。

難民キャンプの住民が別のキャンプに移動することは、メーソットに出ることよりは許可が取りやすかった。しかし、登録難民は許可が下りるが、非登録難民の場合許可が下りなかった。



合同研修の参加者

高齢者活動の開始



高齢者活動

当時多くの高齢者がキャンプに暮らしていたものの、彼らに対する活動はなく、社会的役割も無かった。また、シャンティは民話を基にしたおはなしの絵本を出版することを決め、絵本出版活動に高齢者への活動を組み合わせることを考えた。キャンプの地区リーダーと図書館委員会に協力を依頼して、65 歳以上の人を選出し、毎月特定の日に図書館に来てもらい、子どもたちにカレンの民話(時にはビルマの民話も)を話してもらい、その民話を絵本出版用に収集する

ことにした。子どもたちは活動を通して、カレン伝統文化や歴史について知ることができた。

高齢者活動の日は、民話を語る以外にも一緒にヨガをし、図書館活動に参加してもらった。高

齢者の方達は同年代の友人に会えること、子どもたちと関わりを持つこと、地域における自分達の役割ができることを楽しみに活動に参加していた。また、読み聞かせが上手い参加者もあり、そういった人は活動日以外にも図書館を訪れ、子どもたちに読み聞かせや民話を話してくれた。毎月平均 20 人の参加があったが、参加希望の人が多く、図書館の中に入りきらないために人数制限をしたこともあった。

伝統文化活動の開始

各キャンプから子どもたちがカレンの伝統文化を理解する機会を提供して欲しいという要望を受け、図書館は文化を伝える場でもあることからカレンの伝統楽器(タナキクロ、ソトゥ、カナの 3 種類)と舞踊を学ぶクラスの実施を決め、伝統文化活動を開始した。参加者はキャンプでイベントが開催される時に、演奏や舞踊を披露する機会も得た。この活動を通して参加者達が自信を持ち、自分達の尊厳を得ているように見えた。

講師となる人物は教員ではなく、キャンプ内から技術を持っている人を選定した。講師は演奏や舞踊ができるものの、人に教えることは初めてだったため、子どもとの関わり方について知ってもらう必要があり、図書館委員会は図書館で開催される研修に参加してもらうよう働きかけた。活動の目的を理解してもらうためにも、図書館と関わりを持ってもらうことは必要だった。

難民キャンプ事務所にカレンの伝統楽器があることがあり、実物を確認し 2 種類の楽器を選定した。現物を借りて、メーソットやメーサリアンの店で作製を依頼したが、楽器専門の店ではないために質が良くなく、何度も修理をする必要があるものが出てきた。メーサリアンでは講師がシャンティの用意した楽器では演奏しにくいということで、自分達で楽器を作っていた。活動しているキャンプ全てに同時に伝統文化活動を開始したが、楽器の調達は大変であり、新しい活動について最初は試験的に数カ所のキャンプから始めるようにした方が、全キャンプに展開しやすかったと感じた。



伝統楽器



伝統文化活動参加者

図書館青年ボランティア (TYV) 設立

当時キャンプ内では高校を卒業した後の学習機関はメラキャンプのみにあるポスト高等学校(短期大学)しかなく、勉強を続けることが難しかった。高校を卒業した人、高校生、中学生を、地域に結び付けるために、図書館がどのようなことができるかを議論し、青年が子どもたちのための図書館活動にボランティアとして関わってもらう活動を開始した。コミュニティ図書館が継続的に発展するには、キャンプ内の様々なグループとの繋がりが必要であり、最終的にはこの活動は地域活性にも繋がるだろうという考えもあった。

TYV の仕事はキャンプ毎に異なっており、図書館員の日々の仕事(本の修繕、整理、貸出)のサポート、キャンプで開催される大きなイベントのサポート、キャンプ内の他の NGO の活動をサポートすることもあった。また、ナショナルスタッフがシャントのラオス事務所の図書館事業を視察した際、青年たちが人形劇の実施をしているのを見て、「これはキャンプの活動にも持ち帰るべきだ」と感じて以降は、TYV が独自に人形劇公演(キャラバン公演)を実施するようになった。TYV を終えた青年の中には教員、図書館員、キャンプ委員、CBO のリーダーポジションに就く人がいた。彼らの活動はその次の世代にも影響を与え、TYV のような人になりたいと TYV を希望する人が増えた。

彼らに感動したことは、図書館活動の経験を図書館外でも展開したことだ。例えば、学校図書館が設立された時はその学校に通う TYV が自発的に運営のサポートを始め、子どもたちへの活動を始めていた。活動費用については TYV がキャラバン公演をする際には資金提供をしていたが、2023 年現在、シャントは予算の兼ね合いもあり、TYV の活動資金を支払うことができなくなった。しかし、TYV の活動はそこで終わらず、引き続き地域のため、子どもたちのために精力的に活動している。

カレン語の図書館(リロダ)ではなく、Toshokan という日本名としたのは、シャントが指示した訳ではなく、日本の団体であるということや名前の響きから、キャンプの人たちにより選ばれた。



TYV 研修の実施



TYV によるキャラバン公演

絵本出版

難民キャンプには絵本そのものがほとんどなく、さらに子どもたちの母語で書かれた図書や民

族の昔話、伝統文化に関わる内容が書かれた図書も限られていたことから、子どもたちが自分たちの母語を尊重し、さらに伝統文化に触れる機会を増やすことを目的に、絵本出版活動を 2001 年から始めた。最初は出版専任スタッフを確保できず、更に適切なカレン語でおはなしを書くことは難しいと分かり、カンチャナブリにある学校用の教科書を作っている店に依頼していた。絵本出版は当初はカレン語のみで行われたが、利用者からの要望もあり、途中からビルマ語でも出版をすることにした。

その後は、キャンプ内で暮らす高齢者や教員、子どもたちから収集したカレンの民話や歴史、創作お話を記録し、絵本として出版した(別添 6)。シャンティスタッフとキャンプ内にいる美術教師や過去に絵の勉強をした経験のある人がメンバーとなる出版委員会を作り、2004 年からは各キャンプで絵本コンクールを開催し、おはなしや絵を選定した。また、能力強化を目的に、バンコクから絵本作家、画家、編集者を講師として招き、2006 年にイラストレーター・作家養成研修を実施した。



絵本出版委員会との定例会合

当時の事務所運営

活動拡張にあたって、カンチャナブリに新しい事務所を設立し、新しいスタッフを雇用した。タイ政府とのやり取りが地域ごとに発生することから、2つのフィールド事務所を設立するという判断をした。そして、ティラポンさんにカンチャナブリ事務所の事業コーディネーターになってもらった。新しいスタッフは活動始める前にセイラーなど経験のあるスタッフからの研修を受け、キャンプで実際の図書館活動を見学した。新しい2キャンプの図書館員養成研修については、メーソットから経験のあるスタッフも参加し実施した。

合計3事務所での遠隔運営となり、インターネットも一般的でなく、電話を基本としたやり取りが難しいこともあったが、互いに協力し合った。四半期に一回はメーソット事務所に集まり会議等を行った。四半期会議では、2日間のコーディネーター会議の後に、図書館スタッフ合同会議を2日間行っていた。各キャンプの活動状況を報告し合い、課題などの情報交換を行い、次の四半期の活動計画の確認、見直しを実施していた。

5. 第3期 定着したコミュニティ図書館事業(2008年-2012年)

(1) 定着期概要

当時の難民キャンプ地図・人口(2012年度)

① The Border Consortium(TBC)計測²

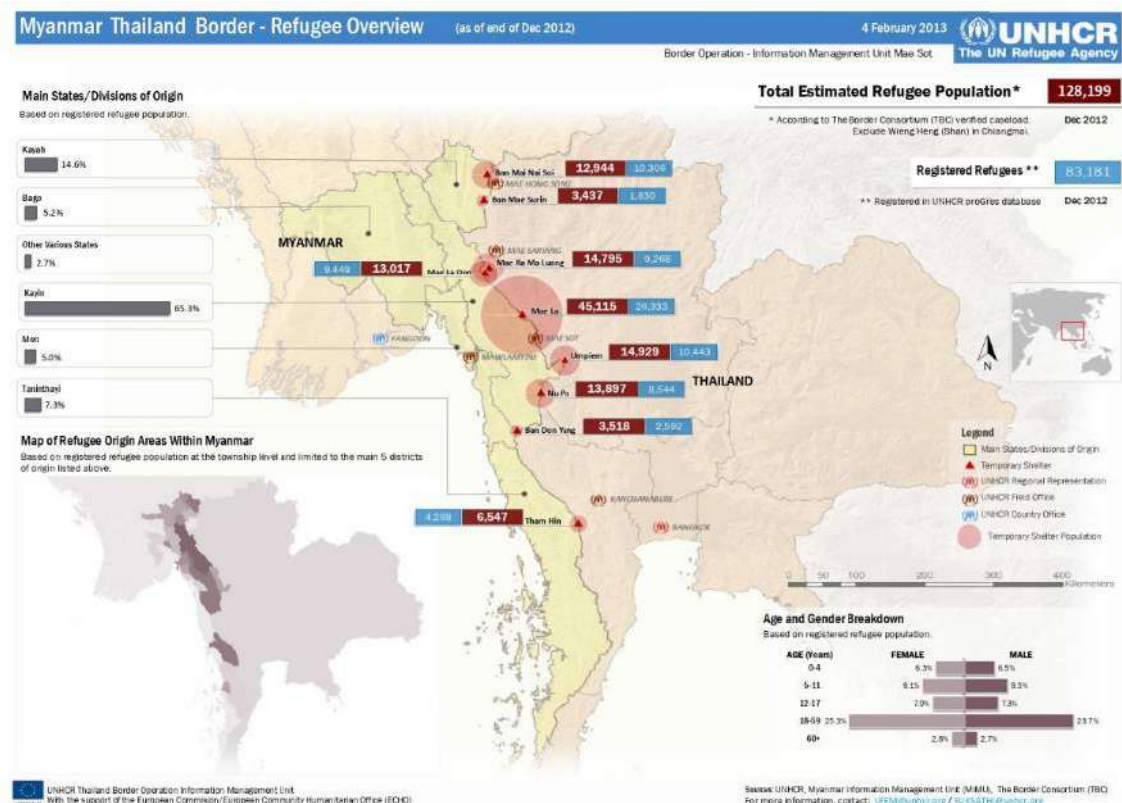
Refugee and IDP Camp Populations: December 2012

Notes:

1. The Verified caseload includes all persons verified as living in the camps and eligible for rations, registered or not (including students). It excludes all previously verified residents now permanently out of camp.
2. Rations are provided only to those personally attending distributions. The Feeding Figure is the actual number of beneficiaries recorded as having collected food rations this month.
3. MOI/UNHCR figures are registered refugees. Most new arrivals since 2005 are not registered. UNHCR records an additional 248 people who have been submitted to the Provincial Admission Boards (PABs).
4. Includes Kayan.
5. Population figures for IDP camps are derived from camp committees on a monthly or quarterly basis depending on accessibility.
6. From TBC Population Database of verified caseload; IDP camps excluded.

注釈翻訳: 1.この計測はキャンプに居住していると確認され、食料配給を受ける資格があるとされた人もされていない人(学生を含む)、すべてが含まれている。以前確認された居住者で、現在一時的にキャンプを離れている人は除外される。2. 個人的に食料配給に参加した人に提供されている。この数値は今月食料配給を受けたと記録された実際の受益者の数になる。3.MOI/UNHCRの数値は登録難民で、2005年以降の新規到着者はほとんど登録されていない。UNHCRはPABにより追加された249人を記録している。4. カヤン人を含んでいる。5. IDP(国内避難民)キャンプの人口は、アクセス状況によるが、キャンプ委員会により月単位又は四半期単位で算出される。6. TBCの人口データからIDPキャンプを除き算出した。

② UNHCR 計測⁵



シャントの活動概要と運営概要

年度		特記事項
2008	活動面	24 館の図書館運営支援(ヌボ第 2 図書館キャンプが事情により第 1 図書館に統合)。伝統文化講師研修、キャンプ合同研修、図書館員現職研修、移動図書館研修、TYV 研修実施。
	支援者	UNHCR、民間寄付
2009	活動面	22 館の図書館運営支援(メラマルアン 1 館を統合、ウンピラム 1 館を閉館)。高齢者活動支援を停止。キャンプ合同研修、図書館員現職研修、移動図書館研修、伝統文化活動講師と図書館員会の合同研修、TYV 研修実施。ウンピラムキャンプにて第 1 回難民子ども文化祭開催。
	運営面	カンチャナブリ事務所閉鎖
	支援者	UNHCR、民間寄付
2010	活動面	21 館の図書館運営支援(バンドンヤン 1 館を統合)。図書館活動実践研修、図書館活動管理・運営研修、伝統文化委員会と Karen Youth Organization (以下、KYO)合同研修、参加型図書館再建・修復研修

⁵ Reliefweb (2023 年 4 月閲覧) <https://reliefweb.int/country/tha>

2011		実施。メラ、ウンピラム、ヌポキャンプにて第 2 回難民子ども文化祭開催。
	支援者	UNHCR、民間寄付
	活動面	21 館の図書館運営支援。伝統文化活動支援の停止。図書館委員会研修、TYV 研修を実施し、コミュニティ図書館マネジメント研修では「活動マニュアル」を配布。メラ、ウンピラム、ヌポ、メラウ(メラマルアン合同)キャンプにて第 3 回難民子ども文化祭開催。
2012	運営面	メーサリアン事務所閉鎖
	支援者	民間寄付
	活動面	21 館の図書館運営支援。参加型図書館建設・修繕研修、絵本出版図書配布研修、図書館員現職研修、図書館マネジメント研修、図書館コーディネーター合同研修、読書推進活動実施前研修実施。第 1 回世界難民の日サッカーフェスティバル開催。メラ、ウンピラム、ヌポ、メラマルアン(メラウ合同)キャンプにて第 4 回難民子ども文化祭開催。
	運営面	ナショナルスタッフ 15 名雇用
	支援者	民間寄付

表 4:定着期概要

活動開始から約 10 年が経過し、様々な図書館活動の継続により、図書館の認知度や利用者が安定してきた。図書館に直接来ることができない人たちが本を手にするできるようにとの考えから、公民館のような場所で読み聞かせを行うなど、これまで以上に図書館を出て地域に足を運ぶようになった。2009 年からは難民子ども文化祭を開催し、キャンプに住むすべての民族に参加を呼びかけ、文化理解の場作りを始めた。図書館活動として実施してきた伝統文化活動は停止し、難民子ども文化祭がその役割の一端を担うようになった。2009 年にキャンプ内の教育システムの改革が実施され、KRCEE が基礎教育を直轄することになった。そして、2012 年 KRCEE の組織図のノンフォーマル教育部門の中に、正式にコミュニティ図書館が位置付けられた。

図書館活動は定着してきたものの、第三国定住により難民キャンプ内で長年勤めた優秀な人材の退職が相次ぎ、また様々な理由によりナショナルスタッフの退職も多くなった時期でもあった。キャンプ内の CBO などと連携した運営で、コミュニティで支えるコミュニティ図書館を実現すること、ナショナルスタッフの能力や意識を強化し、図書館員や CBO のフォローすることの必要性が高まった。また、資金方針の変更により 2011 年から UNHCR の資金提供がなくなることとなり、難民支援の活動資金調達の課題が続くことになる。

(2) 定着期関係者による座談会

参加者(当時の役職)

- 小野豪大(ビルマ難民キャンプ支援事業事務所所長)
- セイラー(プロジェクトマネージャー)
- エッソ(コーディネーター)
- ウェン(総務)

図書館活動の選択について

UNHCR からの資金削減が主な要因となり、活動縮小の検討をしなければならなかった。高齢者活動、伝統文化活動の取り止めと共に、支援する図書館数も減らす必要があった。活動の取り止めについては図書館との四半期会議を活用し、協議の場を持つようにした。また、活動に優先順位をつけ、続けなければならない活動を残すようにした。

図書館数の縮小は立地により判断していき、フォローアップとして学校への移動図書箱活動を増やすようにした。伝統文化活動については、講師が第三定住でキャンプを離れたため、続けられなくなったということも取り止めた理由の一つである。シャンティが伝統文化活動の支援を取り止めても、自分達でイベントに参加するなどして継続したいという意見も出た。また、同時に開始した難民子ども文化祭を通して文化活動は残るとということも取り止めた理由の一つだった。

第三国定住が進む中でのコミュニティ図書館の運営

第三国定住によって、研修を受けた優秀な人材がキャンプを離れることが増え、図書館運営について考え直す必要があった。そこで、KRCEE や TYV に図書館の活動の一部を代わりに担ってもらうことを考えた。ナショナルスタッフは、図書館活動をよりフォローするようになり、キャンプ内の活動の多くを管理できるようになっていた。

ナショナルスタッフは各キャンプの能力や状況を分析し、モニタリングや研修でキャンプを訪問する際、どこに優先的に予算を使うべきか検討し、図書館員や TYV の研修により予算を回すようにした。新しい図書館員を採用した時は、既に経験のある図書館員がいる図書館でしばらく働いてもらい、仕事を覚えてもらうといった方法をとることもあった。また、図書館委員会とは綿密に連絡を取るようにし、KRCEE のキャンプ側組織である Office of Camp Education Entity(以下、OCEE)と協力し、図書館運営を支援した。第三国定住が進む中での事業運営については、シャンティだけでなく全ての NGO が自分達の活動をキャンプ内で完結できるかどうかを検討しており、教育に関しては KRCEE や OCEE との議論が始まっていた。図書館は初めに KYO と協議をしていたが、カレン系難民キャンプの教育を一手に担っている KRCEE と OCEE と協力すべきと判断し、最終的に KRCEE のノンフォーマル部門にコミュニティ図書館が位置付けられることが決まった。



受け継がれる図書館員による読み聞かせ(使用図書:大きなかぶ 福音館書店)

難民子ども文化祭

当時、キャンプ内で他の NGO が行うギター演奏活動等に興味を持つ人々が増え、伝統文化活動の中でも伝統楽器に対する興味が少しずつ離れていた。しかし、人々はカレンの新年といったイベントでダンスや歌を披露し、見るのが好きだったことに加え、活発な活動を行うカレン以外の民族グループもあることが分かった。他の NGO で民族理解に関心を持ち、活動をするところは無かったことも、開催を決めた理由の一つである。

シャンティの内部事情も関わっている。1997 年から 2007 年まで、シャンティはアジア子ども文化祭を実施しており、各国から子どもたちが文化交流のためバンコクやカンボジアに集まっていた。難民の子どもたちもこの文化祭に参加できないかと考え、バンコクへの移動許可を MOI に依頼していたが、許可が下りなかった。そのため、移動図書館活動を展開していた難民キャンプ周辺のタイの村(カレン人の居住する村)から子どもたちを招待することにした。その後、バンコクで開催されたアジア子ども文化祭は参加者にとって有意義な時間だと感じたシャンティが、話を図書館委員会に共有したところ、「なぜキャンプの中でやらないのか？」という声が上がった。図書館は教育と文化活動を実施する場であること、文化理解は互いを尊重することにも繋がる活動であることから、ならばキャンプ内で文化交流を実施しようとなった。

開催においては、少数派の民族のリーダーにも働きかけた。子ども文化祭開催までの道のりは長く、キャンプ内の関係者と何回も会議を持つ必要があった。しかし、それはチームワークに良い影響をもたらし、準備の過程でもカレン人以外が参加し、民族を超えて全員で 1 つのイベント開催に向けて動くことを学ぶことができた。TYV や図書館員も文化祭の昼の部で読み聞かせ等の図書館活動の開催に関わった。

難民子ども文化祭は大きな効果をもたらした。子どもたちが自身のアイデンティティについて考え、団結や同じコミュニティに暮らす互いを理解することについて知り、自分に自信を持つようになったためである。また、各民族の子どもたちが踊りを披露する夜の部では、たくさんの大人も会場に集まり、子どもたちが自信を持って披露する姿を見守った。キャンプ運営に関わる大人も、このイベントが多様性を理解し、平和を作り出す意味あるものだとして理解してくれた。文化祭の開催後は図書館員や TYV が広い視野を持つようになり、図書館活動においても、カレン人たちが優

先の活動になるようなことが無くなるという影響をもたらした。



第1回難民子ども文化祭



第10回難民子ども文化祭

世界難民の日サッカーフェスティバル

八木沢前タイ事務所所長がJリーグと繋がったことをきっかけに、このサッカーフェスティバルのアイデアが上がり、世界難民の日に合わせて開催することが決まった。在タイ日本大使館、公益社団法人日本プロサッカーリーグ、国際交流基金バンコク日本文化センターの後援を受けて、キャンプ内で子どもたちのスポーツ活動を支援する NGO である Right to Play と協働で実施した。普段は MOI からキャンプパスが下りないジャーナリストの方達へのキャンプパス発行が許可され、取材を受けることになり、日本の新聞などに記事が掲載されることで、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプについて知ってもらう良い機会となった（別添 7）。

Jリーグで活躍した選手は、難民の子どもたちに対してのサッカー教室の後に図書館で読み聞かせに参加し、キャンプ内の図書館活動の広報にも繋がった。子どもたちは開催を楽しんでおり、TYV も実施をサポートした。サッカーフェスティバルは 2018 年で終了し、計 10 回開催をした。

絵本出版

特にキャンプ内のイラストレーターが第三国定住により離れてしまい、人材を見つけることが難しかった。そこで、外部のイラストレーター（主にカレン人）を雇うことにした。おはなしについては収集ができたが、以前よりは集まらなくなってきた。

出版担当のナショナルスタッフをシャンティ内に配置できたため、担当スタッフが出版委員会と共に絵本出版を行っていた。それまではカレン人の民話基にした絵本を出版していたが、2011 年には紙芝居も出版した。

当時の事務所運営

資金面の不安定さはあったが、ナショナルスタッフは自己管理ができるようになってきていた。資金状況に合わせるため、活動縮小の判断をしたものの、チームワークは強固になり、対応することができていた。

辞めていくスタッフもいる中ではあったが、問題があった時は共に議論をし、チームとして動いていた。お互いを支え合うという気持ちを持った人材が多かった。それまでは、ナショナルスタッフが日本人に頼ることが多かったが、メーサリアン事務所のプロジェクトマネージャーであるセイラーが所長代行として、事務所運営や事業運営により関わるようになる働きも始まることが決定し、更にチームワークが高まった。多くの日本人と一緒に仕事をする中で、スタッフは様々な考え方や管理能力を理解するようになった。

初めてシャンティで働いた時は何もスキルが無かったが、日本や他の事業国で研修を受け、図書館活動から学ぶことで、できることが増えてきた。できることには限りがあると思うこともあるが、小さなことでもできると思えたこと、子どもたちのために何かできることが、ナショナルスタッフのモチベーションになっていた。



研修講師を担うナショナルスタッフ(エツソ)



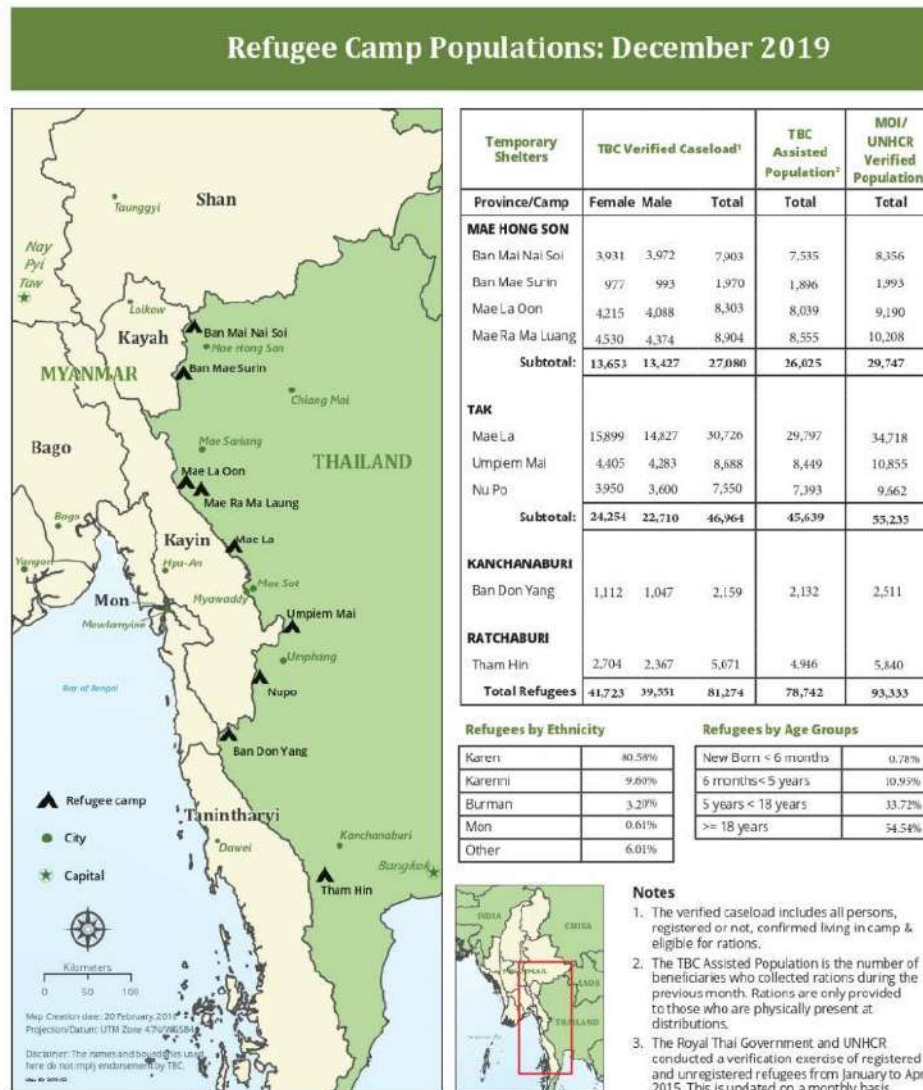
出版絵本を使い読み聞かせの手本を図書館員に伝えるナショナルスタッフ(セイラー)

6. 第4期 帰還準備支援の始まり(2013年-2019年)

(1) 帰還準備支援期概要

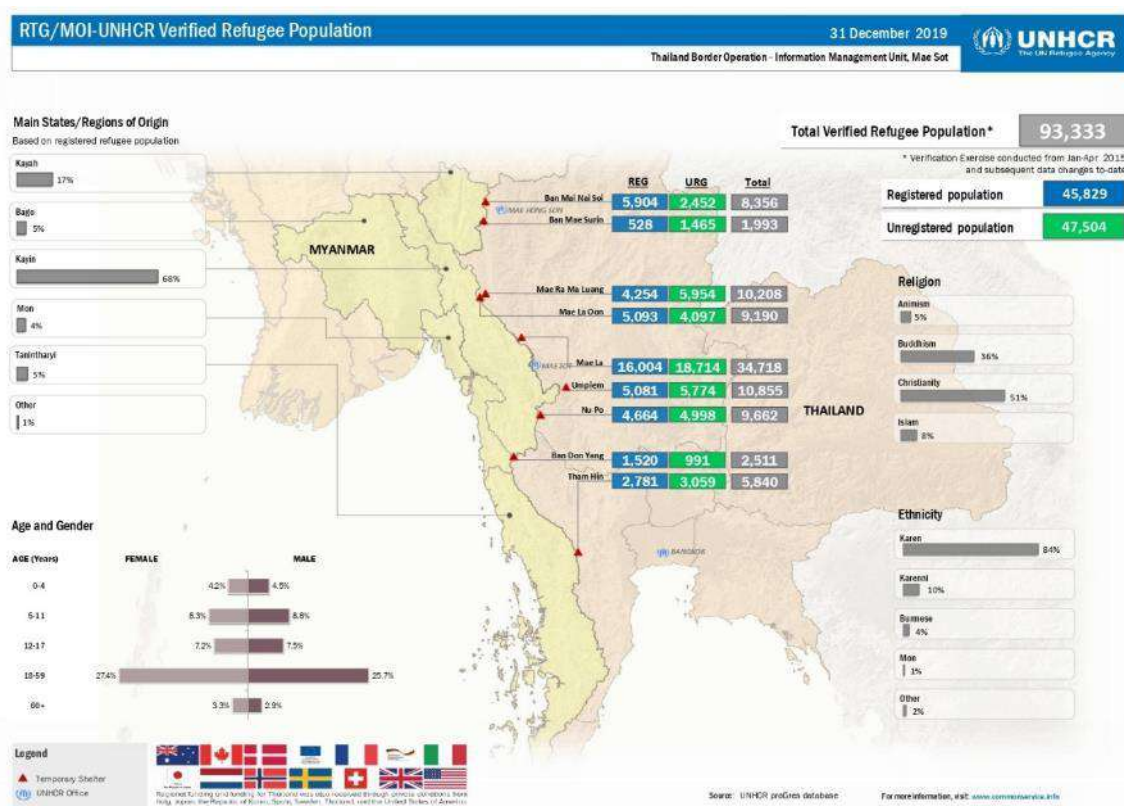
当時の難民キャンプ地図・人口(2019年度)

① The Border Consortium(TBC) 計測²



注釈翻訳: 1. 難民登録の有無に関わらず、キャンプに居住していることが確認され、食料配給を受けているすべての人が含まれる。2. TBCの支援人口は前月に食料配給を受けた受益者の数である。食料配給は物理的に配給に参加した人へのみ提供される。3. タイ政府と UNHCR は、2015 年 1 月から 4 月にかけて、登録難民数と非登録難民数の検証を行った。これは毎月更新されている。

② UNHCR 計測⁵



シャントの活動概要と運営概要

年度		特記事項
2013	活動面	21 館の図書館運営支援。日本の紙芝居専門家による絵本・紙芝居出版研修、図書館員現職研修、図書館運営合同研修、教員向け読書推進研修、TYV 研修実施。コミュニティ情報掲示板を全館に設置。OCEE 内に図書館担当(Library in charge)を配置。メラ、ウンピラム、ヌポ、メラウ(メラマルアン合同)キャンプにて第 5 回難民子ども文化祭開催。
	運営面	メーソット事務所に KRCEE からの図書館オフィサー(Library officer)を配置。図書館運営合同研修実施。
	支援者	JPF、民間寄付
2014	活動面	21 館の図書館運営支援。図書館員現職研修、図書館運営合同研修、教員向け読書推進研修、TYV 研修実施。全館でオフラインパソコンによる情報提供の開始。ミャンマー国内(ヤンゴン)からの書籍購入を開始。帰還を見据え移行計画書の作成開始。メラ、ウンピラム、ヌポ、メラウキャンプにて第 6 回難民子ども文化祭開催。
	運営面	所長交代。シャントがミャンマーに 2 事務所を設立。
	支援者	JPF、民間寄付

2015	活動面	21 館の図書館運営支援。セーブザチルドレンと協働で Literacy Boost in Emergency プロジェクトを実施し、教員向け研修を実施。TYV 研修、教員向け読書推進研修、図書館員現職研修、情報マネジメント研修実施。メラ、メラマルアン(メラウ合同)キャンプにて第 7 回難民子ども文化祭開催。
	支援者	JPF、民間寄付
2016	活動面	21 館の図書館運営支援。28 校の学校図書コーナー整備を実施。TYV 研修、教員向け読書推進研修、図書館員現職研修実施。ウンピラムキャンプにて第 8 回難民子ども文化祭開催。
	支援者	日本 NGO 連携無償資金協力、民間寄付
2017	活動面	21 館の図書館運営支援。TYV 研修、教員向け読書推進研修、図書館員現職研修実施。メラキャンプにて第 9 回難民子ども文化祭開催。
	支援者	日本 NGO 連携無償資金協力、民間寄付
2018	活動面	21 館の図書館運営支援。ヌボキャンプにて第 10 回難民子ども文化祭、第 10 回サッカーフェスティバル開催(10 回目で開催終了)。TYV 研修、教員向け読書推進研修、図書館員現職研修実施。2019 年以降の図書館統合について、移行計画書を基にキャンプ関係者と協議を開始
	運営面	シャンティによるミャンマー側帰還民支援の事業形成調査開始
	支援者	日本 NGO 連携無償資金協力、民間寄付
2019	活動面	15 館の図書館運営支援。21 館の図書館を 15 館に統合。図書館員現職研修実施(TYV 研修については四半期会議の時間を活用し随時開催)。図書館担当の廃止。
	運営面	所長交代。日本人駐在員を置かず、ナショナルスタッフによる事務所運営に移行。ミャンマー・パアン事務所設立に伴い、ミャンマー国境支援事業事務所の 1 事務所となる。
	支援者	民間寄付

表 5:帰還準備支援期概要

第三国定住プログラムの締め切り、ミャンマー本国への帰還の話が進み始め、キャンプ内の様々な支援団体の活動は、難民が本国に戻った後を考慮した活動へと変化していった。コミュニティ図書館活動における帰還に向けた準備として、全館で情報掲示板が設置され、各キャンプの主要図書館ではパソコンが設置された。UNHCR の発行する帰還に関わる情報やミャンマー側のニュースを掲示、パソコン内で閲覧できるようにした。また、利用者が帰還に関わる自発的な情報収集が可能となるよう、ミャンマーからの書籍購入も開始した。更に、将来の帰還によりキャンプの人口が減少した場合に備え、図書館活動に優先順位をつけ、事業縮小の順番などを記した移行計画の作成が始まった。

同時に、コミュニティ図書館と学校教育の連携を強化する目的で、これまで図書室の無かった学校に図書室の設置支援を始めた。図書館に行くことができなかった子どもたちが本を読み始め、学校図書室で TYV が活動を行う、移動図書箱活動により長期の図書の貸出をコミュニティ図書館から学校図書室に行うなどの連携活動が始まった。

2019 年、帰還先での国際支援が徐々に開始されたことを受け、シャンティはミャンマー・パアンに事務所を開設し、カレン州での帰還民支援としてコミュニティ・リソース・センター（以下、CRC）事業を開始した。CRC 事業では住民が生活に必要な情報を得るための図書館と、地域内のイベントやスポーツに活用される多目的ホールの建設が帰還民の人々も暮らす 5 村で実施された。

同年、難民キャンプでは 2014 年から作成していた移行計画に基づきコミュニティ図書館を 21 館から 15 館へ統合した。6 館の図書館の多くは学校やコミュニティで引き続き建物が活用されることが決定し、蔵書はキャンプ内の別の図書館や学校、カレン州側の CRC や国内避難民地域の学校へ移管した。キャンプ内では帰還の動きが始まったことで、事業撤退する団体が増え、生活基盤支援の減少が始まった。過去の内戦の経験から本国帰還を希望しない住民の中には、行き場のない思いから精神不安を抱える人もおり、図書館で本を読むと不安を忘れることができると、居場所としての図書館の役割が強まってきた。

（２）帰還準備支援期関係者による座談会

参加者（当時の役職）

- 中原亜紀（2019 年よりビルマ難民キャンプ支援事業事務所所長、2-7 のみ参加）
- 菊池礼乃（調整員）
- セイラー（所長代行）
- エッソ（コーディネーター）
- ウェン（総務兼所長代行補佐）

第三国定住と本国帰還の影響の違い

2012 年に KNU とミャンマー政府の停戦合意があったことを受け、UNHCR と CCSDPT による難民の恒久的対策についての協議が開始され、本国帰還の枠組みができた。以降、難民の自主的帰還が始まり、2015 年の全土停戦協定により、帰還の動きが更に強まった。2016 年にタイ政府、ミャンマー政府合意の下での帰還プログラムが実施され、公式に難民が本国帰還をした。2013 年に主な三国定住の受け入れ先であったアメリカからの締め切りが通達されたこともあり、多くの人が帰還について協議をするようになった。このようなキャンプ内の動きがあったこと、また 2013 年からジャパン・プラットフォーム（以下、JPF）からの資金提供を受けたこともあり、帰還準備支援について取り組む必要があった。

帰還の動きが始まり、キャンプ内では多くの変化があった。図書館員委員会、図書館員、利用者から、将来の図書館について不安の声が上がるようになった。大体的な帰還が始まったら、図

書館も一緒に移動して欲しいといった要望も多く上がった。人材の変更はシャンティ内部、キャンプ内共に第三国定住の時と同様に発生したが、家庭の事情や健康等も理由であった。

人々は将来が見えないことから困惑しており、フェイクニュースではない正しい情報が必要とされ、図書館は情報提供施設として機能する必要が出てきた。また、第三国定住の時は、英語の図書のリクエストが多かったが、本国帰還の時はビルマ語の図書のリクエストが増えた。

帰還準備として開始した活動

キャンプ内ではステークホルダーが帰還に関わる情報共有や協議を開始する会議が開催されるようになった。キャンプリーダーが帰還候補地の視察をする動きも開始され、その結果等が共有された。他の NGO もミャンマー側の情報共有を始めるようになり、シャンティはより情報共有に力を入れるようになった。UNHCR からキャンプ内での情報提供を支援したいと話があり、7つのカレン系難民キャンプのコミュニティ図書館に設置する 18 台のパソコンを支援してもらった。21 館全ての図書館に設置はせず、9 館の図書館を選出し、1 館につき 2 台設置した（人口少ないキャンプは 1 館の図書館、人口の多いキャンプは 2 館の図書館にパソコンが設置された）。当時 UNHCR ではポータルを作成しており、そこでミャンマー国内や帰還に関する情報を提供していた。ポータル内の情報をパソコンで閲覧できるようにし、更に印刷して情報掲示板にも掲示するようにした。UNHCR 以外に、キャンプ内で活動する情報提供チームとも連携し、彼らから提供される情報も情報掲示板に掲示し、図書館の新着図書なども掲示した。また、ナショナルスタッフが読み聞かせや手遊びを実践しているビデオを作成し、図書館員の個人練習用にデータをパソコンに入れた。

キャンプ内に電気が通っていない図書館には、ジェネレーターやガソリンを供与した。ターク県内のキャンプは電気が一部の所には通っているため、そこから電力を借りて費用を支払うという対応を取った。その後、ソーラーパネルの供与を行ったキャンプもある。

図書館員はパソコンに触れたことが無く、操作について知らなかったため、シャンティは図書館員に対するパソコン操作マニュアルを作成した。図書館員はそれを基に基本的操作を覚え、利用者に案内するようになった。いくつかのキャンプでは情報チームや OCEE にパソコンに詳しい人がいたため、何か問題が起きた時は図書館に来てもらうなどの協力を得ていた。

情報提供以外には、学校でビルマ語を教えるようになったため、青年や大人向けにビルマ語の文法等に関する本をより配架するようになった。また、難民キャンプで働いてきた人々は、その証明が政府からなされないため、帰還後に仕事を得るために、他の NGO が教員に対して証明書を発行する動きを始めた。シャンティも KRCEE と共に図書館員の実績を証明する図書館員ポートフォリオの作成を始め、図書館員毎に勤続経験、研修修了書などを取りまとめ、最終的に KRCEE の承認をもらい図書館員へ渡した。

また、コミュニティ図書館の運営をキャンプ内に引き継いでいくことを目的に、図書館員のまとめ役として各キャンプに図書館担当というポジションを OCEE 傘下に用意し、図書館担当が各図書館からの報告をまとめシャンティに報告するという形を取り始めた。担当はキャンプ内で会議

がある時にも図書館を代表して参加した。更に、KRCEE スタッフを 1 名図書館オフィサーとしてメーソット事務所で雇用し、シャンティで行う図書館支援の業務を覚えてもらうようにした。しかし、図書館担当と図書館オフィサーの給与はシャンティが支払っていた関係で、2019 年からは予算の兼ね合いで図書館担当は廃止となった。



図書館前に設置した情報掲示板



パソコンの利用者

ミャンマー側からの図書購入

それまで、タイから購入できるビルマ語の本の数が少なかったこともあり、本の調達先は限られていた。しかし、民主化によってミャンマーの情報がキャンプ内にも入るようになり、図書館の利用者からはもっと多くの種類のビルマ語の本や新しい本を読みたいというリクエストが出てきた。

2014 年にシャンティがミャンマー事務所を開設した後、メーソット事務所にミャンマー人スタッフがいたことや、国境地域だけでなくミャンマー国内への渡航ができるようになったことから、ミャンマー国内に出向き、書店調査する機会を得ることができた。書店調査やオンラインで選定した本は、ミャンマー事務所を介してヤンゴンにある書店へ支払いを実施し、タイ側まで本を配送してもらった。ミャンマーから購入した本について、利用者は満足しているように見受けられ、ニーズに応えることができたと感じた。初めてミャンマー国内で調査した時は、青年や大人向けの本ばかりで、子どもの本は少なかった。しかし、最近になって子どもの本がミャンマー国内にも増えてきたため、より多くの本を入手できるようになった。

カレン語について、種類は少なく、カレン人ネットワークにより新しい本を入手するようにしている。ミャンマー国内やメーソットにあるカレンの神学校などから英語からカレン語に翻訳されたリーダーシップスキル、モラルなどに関わる本を調達した。

学校図書室整備

それまでは学校向けの移動図書箱活動(学校用に移動図書箱を設け、原則 1 カ月間 30 冊、図書を最寄りのコミュニティ図書館から借りることができるサービス)の実施において、移動図書箱で長期貸出した本をどのように扱い、学校で活用していくかについての研修を教員向けに行っていた。普段の貸出では許可していない参考書や辞書などを借りることができるため、多くの学校が興味を持ち、時には生徒と一緒に図書館を訪れて本を選定していた。

これ以上図書館を増やすことは資金的に難しい中で、キャンプ内で本を手にする機会を増やしていくにはと考え、本の入れ替えによって図書館には配架されなくなった本などを活用して学校図書館の整備をすることにした。また、多くの NGO が予算縮小の課題を抱え、活動を縮小やキャンプ内に移管しようとしており、これまで以上に学校を支援する必要性が出てきたことも活動実施背景の一つである。色々な学校からリクエストが入った中で、自分たちの力量も考慮し、28 校を選んで実施した。選定条件は活動が活発であること、生徒数が多いこと、場所があることなどであった。また、校長、OCEE や NGO との会議により、意思を確認し、OCEE と合意の下で最終的に対象校を決定した。現在は、帰還によりキャンプ内の人口が減ったことを受け、選定した学校が統合されたこともあり、整備した学校図書館数は 24 校となっている。

学校図書館の整備により、より多くの子どもたちに読書機会の提供ができ、TYV が学校で読み聞かせといった子ども向けの活動を実施することもあった。また、対象校へ学校図書館研修が実施された以降は、図書館員がフォローアップのために学校図書館に協力するなど、学校とコミュニティ図書館との関係も強まった。カレンニー系難民キャンプでの教育を支援している JRS との協働も始まり、カレンニー系キャンプにもカレン語とビルマ語の本の配布を始めた。

絵本出版について

2013 年に日本の紙芝居専門家である、やべみつのり氏を講師に絵本・紙芝居出版研修を実施した。また、やべ専門家にはメラキャンプで身近なもので作るおもちゃ作りを指導頂いた。2014 年にキャンプ内の青年層からのリクエストによりカレン語とビルマ語の絵本に英語を併記することが始まった。また、KRCEE からの依頼があり、小学校用のカレン語とビルマ語教科書と教員用指導書の印刷支援を行った。

予算の関係もあり、出版タイトルや印刷冊数は少しずつ減らしていった。また、ナショナルスタッフの出版担当を置くことができなくなり、出版についてはセイラーが外注の編集者やイラストレーターとやり取りを行っている。この期間に出版した絵本の中には、当時のキャンプ内での自殺やドラッグ利用の課題を反映したものもある。2016 年は写真集「生きることを知る図書館」を作り、写真と共に利用者の声を掲載し、これまでの活動記録や図書館の大切さを伝えるものとして残すことにした。



写真集で活動を振り返る図書館員



教科書を受け取った子どもたち

移行計画とその実施

利用者から、ミャンマーに戻る時には図書館と一緒に来て欲しいという声があり、また UNHCR や他の NGO との会議と、キャンプ内の人口が減少している状況から移行計画を作成する必要があると判断した。どの活動を最後まで残すかをポイントに、ナショナルスタッフ全員で協議した後は、主にセイラー、菊池調整員でドラフト作成を行った。最後にはミャンマー側に図書館を置くことも想定しており、どのような資材をミャンマー側に持っていくかなどが計画された。2014 年にドラフトができ、KRCEE と Karen Education Department (以下、KED) とのすり合わせが始まり、2018 年に最終化された。

移行計画の実施前、セイラーは図書館で行われる全ての会議に参加し、キャンプリーダー含む全ての関係者に説明を行った。一番に伝えたことは、人々に不安を残さないために、シャンティはキャンプが閉まるその時まで支援を続ける方針を持っているということ、そこまで活動を続けるための計画であるということだった。また、KRCEE や KED の意見も反映されていることを説明し、もし何か改善点や課題があれば、自由に言って欲しいと依頼した。関係者からはその場で質問が上がり、その質問にしっかりと返答したことで関係者は納得し、今も課題は起こっていない。人々もキャンプの状況を理解しており、それが移行計画の理解に繋がった理由の一つでもある。NGO として、自分達だけでなく関係者と共に計画を作っていくこと、受益者へ説明責任を果たすことが一番大切であると学んだ。

2019 年には移行計画に基づき、コミュニティ図書館の統合を実施した。統合する図書館の選定に関しては関係者と協議し、子どもたちが通いやすい立地の図書館を残すようにし、統合された図書館の本の一部を移動させた。統合後も図書館の建物を残すことに決めたキャンプが多く(1 館のみ老朽化により取り壊すことにした)、コミュニティ図書館としては使われなくなったが、例えば学校の一部として使われ、小さい図書コーナーを残している。メラマルアンキャンプでは自分達の力でコミュニティ図書館として維持していきたいという希望があり、図書館として残す形を取った。主に近隣の学校の利用者が多いため、学校関係者が図書館運営や建物管理を担い、地域の人も建物修繕の際には協力し、図書館が現在も住民の力のみに継続されている。

カレン州帰還民支援との連携

シャンティが 2018 年にミャンマー側の調査を開始し、2019 年にカレン州の帰還民支援事業として CRC を開館、タイ側からも CRC への支援を行った。キャンプ側での経験を活かし、本棚の設計を行い、必要な資機材についても手配を行った。また、図書館研修の実施も担い、CRC 運営委員会や図書館活動を担う CRC 職員やの養成を行った。既にキャンプ側での長年の経験があるというのは強みで、CRC 運営委員会が運営での課題に直面したときは、キャンプ側の経験を伝えアドバイスすることができた。例えば、運営委員は兼任で CRC の管理に多くの時間をかけられないと悩んでいたときは、TYV の活動を紹介し、それによって CRC も地域の青年にボランティアとして関わってもらうことを呼びかけるようになった。

キャンプ側にもミャンマー側で CRC 事業が始まったことを伝えたところ、関係者はミャンマー

側にも図書館ができたことに非常に興味を持っており、自分達も運営をサポートしてみたい、CRC を訪問して読書推進活動で交流できたらよいといった意見が出てきた。帰還先を検討しているキャンプの人たちにとって、パソコンや情報掲示板を通してではないリアルな状況が聞けるよい機会となった。

コミュニティ図書館の役割の変化

NGO が撤退し、生活基盤が不安定となるセンシティブな時期であったため、人々に混乱を起こさないように図書館運営を行っていた。また、図書館委員会や図書館委員に多くの役割を担ってもらうように徐々に移行していった。それはコミュニティの人たちが図書館運営を理解し、自立をしてもらうこと、オーナーシップを持ってもらうことを目的にしていた。シャンティはモニタリングを通して、難民主体の運営で彼らが直面する課題への助言を行うようにした。

先が見えない将来への不安からか、多くの人がこれまで以上に精神面での支援を求めている。コミュニティ図書館は人々のための場、安心や自由を感じることでできる場、ストレスを忘れる場にもなっていた。TYV は図書館以外にコミュニティ内で子どもたちへの読書クラブを開催しており、それも子どもたちのストレス軽減に繋がっていた。この時から利用者のインタビューや図書館の四半期会議では、「本を読んでいるとストレスを忘れることができる」と言う言葉が良く聞かれ、図書館が精神的な不安が減らず場所として機能していることが分かった。教員からは学校には行きたくないと言っていた子どもが、図書館で本を読み、図書館活動に参加するにつれ、学校に戻りたいと思うようになったという話も上がった。子どもたちは図書館活動を楽しむ中で、自分より幼い子どもに読み聞かせをするようになり、図書館員の仕事を手伝うようになり、夢を持つようになるなど変化を見せていた。大人からも「生活で怒りを感じるがあっても、図書館に行き読書に没頭すると忘れることができ、リラックスする」といった声があった。高齢者からも「読書が新しい経験となり図書館で楽しい時間を過ごせる」という声も上がった。

当時の事務所運営

ナショナルスタッフが主体となった事務所運営に移行していた。予算の兼ね合いもあり、ナショナルスタッフを最低限の人数にしなければならなくなった。スタッフ同士が家族のように何でも話し合える関係性になっていたため、人数を減らさなければならぬ時も、背景を説明することで理解してもらった。また、残るスタッフもその分自分の業務が増えることを理解した。日本人の所長から言うのではなく、長い間一緒に働いてきたセイラーが直接伝えることが、スタッフにとっても良かった。

これまでキャンプでの活動が好きで働いていた自分が、事務所運営などを担う立場についた理由は、自分がやらなければキャンプの活動も終わってしまうと思ったからだ。但し、スタッフに話すことが辛いと思ったことは、これまでに無かった(セイラー)。

スタッフは全員キャンプ内の関係者に寄り添って働いており、仕事を自分たちのライフワークだと捉えていた。シャンティ本部が、キャンプが閉じるまで活動を続けるとの方針を掲げてくれたこと

が励みにもなった。事業縮小の中で辞めていくスタッフは、「どうかコミュニティ図書館事業を続けてくれ、自分は辞めることになっても構わないが、事業は止めないで欲しい」と言ってくれた。



帰還プログラムの帰還日当日、難民キャンプで出発を待つ人々



機関プログラムの帰還日当日

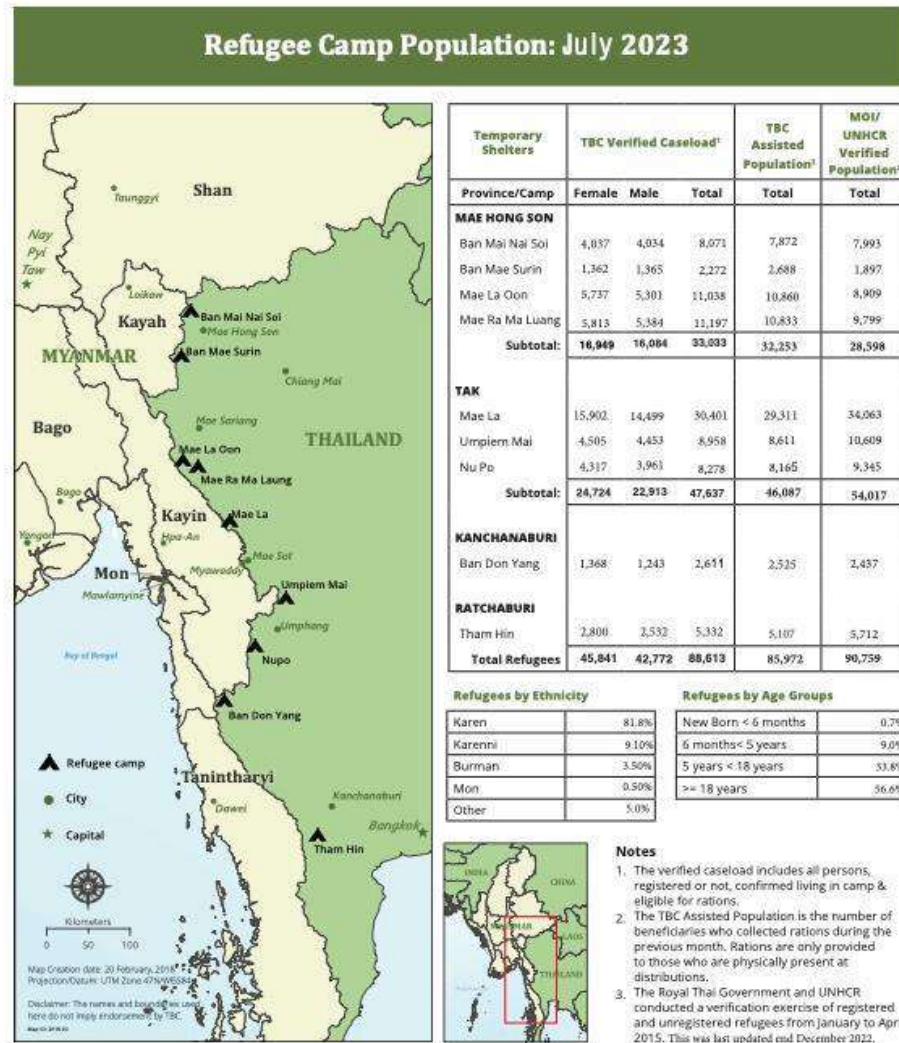
人々を乗せて、タイ・ミャンマー国境にかかる友好橋を移動する車

7. 第5期 コロナ禍、軍事クーデター以降の事業運営(2020年以降)

(1) コロナ禍、軍事クーデター以降の概要

現在の難民キャンプの地図・人口(2023年6,7月)

① The Border Consortium(TBC) 計測²



注釈翻訳: 1. 難民登録の有無に関わらず、キャンプに居住していることが確認され、食料配給を受けているすべての人が含まれる。2. TBC の支援人口は前月に食料配給を受けた受益者の数である。食料配給は物理的に配給に参加した人へのみに提供される。3. タイ政府と UNHCR は、2015 年 1 月から 4 月にかけて、登録難民と非登録難民の人口検証を行った。これは 2022 年 12 月に最終更新された。

② UNHCR 計測¹



シャンティの活動概要と運営概要

年度		特記事項
2020	活動面	15 館の図書館運営支援。コロナ禍で必要な衛生用品の支援、それらを活用し図書館の開館を継続。オンラインでの四半期会議を行い、その際に図書館員、TYV 向け交流会を開催し能力強化を実施。
	支援者	民間寄付
2021	活動面	15 館の図書館運営支援。クーデター後に発生したタイ側への避難民に対して物資支援を実施。主にオンラインでの四半期会議を行い、その際に図書館員、TYV 向け交流会を開催し能力強化を実施。
	運営面	ミャンマー事務所の 1 事務所として位置付け
	支援者	民間寄付
2022	活動面	15 館の図書館運営支援。四半期会議を行い(1 部オンライン)、その際に図書館員、TYV 向け交流会を実施し能力強化を行う。
	運営面	ナショナルスタッフ 6 名雇用
	支援者	民間寄付

表 6:コロナ禍、軍事クーデター以降概要

2020 年からは新型コロナウイルス(以下、コロナ)の感染拡大の影響により、コミュニティ図書館を一時的に閉鎖しなければならなかった。キャンプ内で陽性者が発生した際は住民への厳しい移動制限が始まり、支援団体にも制限がかかり、通常の支援活動を実施できないことがあった。シャンティは遠隔で図書館運営支援を実施し、図書館では図書の貸し出しや移動図書箱などの方法を活用することで、利用者に読書の機会を継続して提供した。また、閉鎖の時期を利用して図書館内の清掃を行い、状況が落ち着いた後に利用者の検温や入館前後の手洗いといった感染対策を徹底した上で再開した。

シャンティのミャンマー側の活動では CRC が 5 つの村で開館し、サービスの提供をしていた。コロナによりタイ・ミャンマー間の国境が閉じ、タイ側からの図書館員への研修はオンラインを利用して実施された。また、キャンプ内では本国帰還のプロセスが一時的に停止となった。本国帰還のプロセスが再開の見込みが出てきた 2021 年に、ミャンマー本国で軍事クーデターが起こったため、再度停止した。国境周辺で爆撃音が聞こえることもあり、住民の不安や恐怖、ストレスは日ごとに増している。

(2) コロナ禍、軍事クーデター以降の関係者による座談会

参加者(当時の役職)

- 中原亜紀(ビルマ難民キャンプ支援事業事務所所長)
- セイラー(副所長)

- エツソ(コーディネーター)
- ウェン(総務兼副所長補佐)

コロナ禍の図書館運営



入館前の検温による感染対策

コロナが発生することは、全く予期していなかった。感染防止のために医療、食料支援以外の NGO はキャンプに入ることができなくなり、学校は閉校となり、住民は一時的に地区間の移動を禁止された。どのようにして支援を続けるかなショナルスタッフ全員で検討をし、モニタリングや研修をオンラインで行うことを決め、これまでに研修を受けた経験がある図書館委員会にも直接知識を共通してもらう役目として、研修に参加してもらうようにした。

キャンプ委員会、図書館委員会、シャンティで協議した後は図書館運営を臨機応変に対応するようにした。コロナ禍で利用者の人数制限を行い、貸出可能冊数を上げて、これまでよりも長期間本を貸出することで、図書館に通う回数を減らすようにした。シャンティは読み聞かせ回数、本の補修といった図書館活動の記録をメモにするように、図書館員に指導をした。また、活動写真を撮影して送るように伝え、遠隔でも活動の様子が分かるようにした。コロナ前はモニタリング等で確認できるため、記録や写真撮影について厳しく指導はしていなかったが、コロナ禍で図書館員に習慣が根付いたため、今も継続している。

シャンティは図書館が一時的に閉館を決めた際に、図書館で使用する石鹸、洗剤といった衛生用品を支援し、図書館の清掃を行った。図書館を再開する際には、キャンプ関係者が住民に図書館には衛生用品があるので心配しないよう呼びかけた。また、利用者には入館前に検温をし、手を洗ってもらうようにした。現在、検温は止めているが、手洗いは継続しており、手洗い用の水管理は図書館委員会が行っている。

何人かの図書館員はスマートフォンを持っていたため、シャンティとの連絡用でインターネットの費用を少額であるが支援した。以前はキャンプに携帯電話の電波は入っていなかったが、最近では入るようになっている。キャンプによっては電波がある場所は限られており、その場合は電波のある山の上などに図書館員や図書館委員が登り、シャンティへ連絡した。

キャンプ委員会も協力し、特にターク県内のキャンプでは会議をオンラインで実施するなどしてくれた。コロナ禍の経験により、モニタリングや研修実施には対面以外の方法があることを学ぶことができた。キャンプ関係者も遠隔でどのように自分達がシャンティと連携すればいいかを理解してくれ、スムーズにいくようになった。

軍事クーデターの図書館活動への影響

軍事クーデター以降、人々は更に将来どうしたらよいか不安に思うようになっていた。MOI からキャンプ内での活動について特に指導はなく、他の NGO と共に支援方法を検討した。コミュニティ図書館では、間違った情報を流さないよう、情報提供に特に注意を払うようにした。人々が不安から、より情報を必要としていたからだ。シャンティがミャンマー側に事務所を持っていることを知っている人たちから、現状はどうなっているのか聞かれることが多かったこともある。また、日本政府が軍事クーデターに対して、どのような対応を取っているのかという質問も受けた。コロナや軍事クーデターの不安からか、引き続きドラッグ利用、家庭内暴力、自殺の話がキャンプ内で挙がっている。人々の精神面への支援は必要とされており、コミュニティ図書館の人々の心を支える役割は引き続き前フェーズ同様に求められている。

CCSDPT では今のキャンプに再度難民が流入するという最悪の場合に備え、その場合に各 NGO がどのような行動を取るか計画を作成した。教育セクターでは子どものための安全な場所の提供を検討していたが、幸いなことに流入はなく、その計画が執行されることは無かった。

コロナの影響か、軍事クーデターの影響かは分からないが、いくつかのミャンマー国内の本、雑誌の印刷が廃止された。購入に関しては引き続き可能だが、ミャンマー国内で大きな額の送金ができなくなったため、メーソット事務所から書店に送金する方法に変更した。過去にはミャンマーでブックフェアなどが開催されていたため、再度ミャンマーにタイ側から渡航できる機会ができれば、本をもう 1 度選定したい。

事務所運営について

シャンティ組織内でメーソット事務所は、2019 年からミャンマー側のパアン事務所と同じ事務所運営下に置かれ、2021 年からはミャンマー国内にある 3 事務所と同じ事務所運営下に置かれることになった。メーソット事務所では、所長やミャンマー側のナショナルスタッフとの遠隔調整が始まることになった。しかし、インターネットも安定していること、遠隔でもスケジュールを共有するツールがあることや毎月オンライン会議により、徐々に難しさは薄れていった。メーソット事務所にとって、新しいスタッフへの研修はこれまでやってきたことの 1 つであり、ミャンマー側のスタッフの入れ替わりがあっても、図書館事業や CRC 事業について説明していった。

所長にとって国を超えた事務所運営はシャンティとしても初めてのことであり、非常に難しかった。2019 年にミャンマーカレン州に新しい事務所を立ち上げて、メーソット事務所にサポートをもらいながら CRC 事業を実施したが、ミャンマー側の新しいスタッフはまずシャンティやその活動について理解する必要があった。新しいスタッフにとって CRC 事業の実施規模は大きく、新しい事務所での新事業の実施は小さい規模から始めていく方が良いと感じた。

今求められている図書館の役割

コロナや軍事クーデター以降、予算の関係もあるが、図書館活動の継続に注力をしており、研修などはこれまでより機会が減った。図書館委員会からは、これまでに実施していた各種研修の

実施、伝統文化活動の再開、難民子ども文化祭、カレン語の図書の実、学校図書館の活動支援といった要望があるが、予算が限られていることもあり、基本的な図書館活動の支援に留まっている。他の NGO も予算の課題には直面しているため、キャンプ側からはシャンティの状況を理解しつつも、図書館以外の学校校舎の建設や修繕などの支援依頼が入っている。但し、図書館の建物も老朽化が進んでおり、活動を継続し、子どもたちへ良い環境を提供し続けるためには、小規模の修繕を継続する必要がある。

なにより軍事クーデターが起こった後、ミャンマー国内の政情が悪化しており、帰還の再開目途が立たない中で、人々の不安が募っている。彼らは引き続きキャンプに残らなければならなくなり、困難を抱えたままである。そのため、キャンプの人々からは変わらず図書館活動を続け、居場所を提供することが求められている。シャンティが彼らのためにできることは、コミュニティ図書館をできる限り継続することである。限られたナショナルスタッフの人数ではあるが、シャンティの掲げるキャンプが閉じる時までコミュニティ図書館を継続するという思いとスタッフの思いは一つである。



雨季の難民キャンプにアクセスするまでの道



図書館を利用する子どもたちと図書館員

8. 約 20 年の成果・課題・教訓

本事業関係者による座談会や各種資料を通して、これまでの事業の歴史を振り返った。以下、そこから導き出された成果、本事業の課題、類似事業を実施する際の教訓について記載する。

(1) 成果

第一の成果として、20 年間に渡り、教育・文化支援を目的としたコミュニティ図書館事業が継続され、誰でも利用できるコミュニティ施設として難民の人々から利用され続けてきたことが挙げられる。7 つのカレン系難民キャンプで、図書館運営委員会の組織、図書館建設・修復、カレン語・ビルマ語の絵本の出版、図書館員や青年ボランティアといった図書館関係者の研修、図書館活動や伝統文化活動の実施を 20 年間継続してきた。その結果、子ども、青年、大人、高齢者といった様々な年代が図書館活動に関わっている。コミュニティ図書館は、唯一のノンフォーマル教育の場であると同時に、難民の人々へ外の情報に触れる貴重な機会を提供し、外の世界と繋がるための窓口やきっかけとなっている。これにより図書館利用者は、図書館で学んだことをもとに、将来の選択肢を広げることができている。また、閉鎖的な難民キャンプで不安を抱えがちな利用者にとっては精神ストレスを減らす場としても機能している。

第二に、図書館活動により伝統文化の維持、文化活動による民族間の相互理解促進と平和教育の推進に寄与している点が挙げられる。図書館での伝統楽器や舞踊のクラスの実施、難民子ども文化祭の開催により、伝統文化の維持に努めたことに加え、特にカレン語で書かれた子ども向けの絵本が全くない中での絵本出版活動を行った。これにより、文字という文化維持や、民族の持つ口承文化を絵本として形に残した。難民子ども文化祭では、難民キャンプの中でカレン以外の少数民族にも焦点を当て、文化の維持と共に、民族の垣根を超えた相互理解に繋がった。現在もミャンマー国内では民族間で対立などが続いており、難民キャンプでの文化活動は平和教育に寄与している。

第三に、難民によって自主的に図書館が運営されていることが挙げられる。毎年実施された各種研修により、図書館関係者の能力強化がなされ、難民による主体的な図書館運営が行われている。例えば、年間活動計画の策定、図書館員の交代、本の紛失といった問題が起こった時の対応は、図書館委員会が中心となって行われている。また、事業開始時から国連機関や他の NGO、難民委員会と協力し、事業を実施しており、他の NGO、CBO、第三国定住をした人々など、様々な協力者がキャンプ内外に存在している。

第四に、2012 年の定着期以降、日本人による事務所ならびに事業運営体制は終了し、ナショナルスタッフによって運営されていることが挙げられる。事業開始当初から BRC 事務所に入職したナショナルスタッフが副所長となり、深い事業への理解の下、他スタッフと協力して事業運営をしている。また、活動を通してナショナルスタッフ全員が難民キャンプ関係者との信頼関係を構築しており、コロナ、軍事クーデターといった予期せぬ事態が起こる中で、臨機応変な活動対応を取ることが可能にしている。この成果は、ナショナルスタッフの能力強化への投資が有効であることと、彼女ら・彼らの難民へのコミットメントが高いことを示している。

(2) 課題

課題は4点ある。1点目は事業継続のための資金調達である。受益者である難民自身による資金調達は不可能である。難民キャンプの外から出ることができない、就業の機会がない難民の人々には図書館員への給与支払い、図書館に必要な本や建物の修理用資材の調達はできず、運営を継続するにはキャンプ外からの支援が必要となる。つまり、難民キャンプの社会基盤を支える各 NGO による継続的な資金調達が必要である。しかし、国際的には更に緊急下にある難民への支援が優先され、本難民キャンプに対する関心は低下しており、ミャンマー(ビルマ)難民キャンプを支援する全ての NGO が資金調達の課題に直面している。活動継続をどのように担保するかということは、シャンティのみでは解決できないものであり、ミャンマー(ビルマ)難民について国際的に発信する必要性がある。関連して、本難民キャンプの教育に関わる NGO 全体ではアドボカシーに向けた取り組みがなされているが、公教育が優先される傾向にあり、シャンティの図書館事業の経験が難民キャンプ内の教育に関わるアドボカシーに活かされていないことも課題である。

2点目は、人の定着の難しさである。第三国定住や本国帰還による、コミュニティ図書館関係者の入れ替わりが多く、知識や技術定着のために定期的に研修を開催しなければならず、ナショナルスタッフの技術的介入もその度に必要であった。この課題に対応するため、KRCEE や OCEE といったキャンプ内教育機関との連携、図書館員同士の交流の場を作って互いに教え合うといった属人的ではない仕組みづくりを継続することが重要である。

3点目は、難民キャンプでの図書館事業による長期的な効果やインパクトが定量的に確認できていないことである。図書館事業によって人生が変わったと話してくれる人はいるものの、そのストーリーの蓄積は限定的になっている。また、第三国定住や本国帰還をした図書館事業の関係者や受益者達のその後については十分に追えていない。定性的な調査に加えて、コミュニティ図書館利用者に対する長期的なインパクトを定量的に明らかにする努力が求められる。

4点目として、現在実施している事業の定期的な見直しが必要とされる。各事業フェーズの終了毎に終了時評価を行ってきたが、現在は最終フェーズを難民キャンプが閉じる時まで継続するという方針であることから、シャンティ内部での事業評価は2014年以降実施されていない。(毎年事業計画、事業報告はナショナルスタッフによってなされている)。資金上の課題があることから、新しい展開を考えることは困難である一方で、変わりゆく難民キャンプの状況に適した事業内容となっているのか、見落とししているニーズはないかを評価を通して見直すことが必要である。

(3) 教訓

関係者からの座談会で、何度か話に上がった教訓として4点を挙げる。一つ目は、初めての活動、事業の際には団体の力量に合わせた規模で始め、徐々に対象を広げることである。例えば伝統楽器の教室を始めた時は7キャンプすべてで同時に開催したために、楽器の調達や不具合が起こったことがあった。一部のキャンプで試験的に開始し、その結果を見て改善を加えながら、他のキャンプに広げるといった手法が活動によっては効果的な場合がある。今後新たな活動を開始

する際は、団体内の力量やカウンターパートの力量を確認し、展開方法を検討する必要がある。

二つ目は、ナショナルスタッフによる運営が行われてきたという成果の一方で、課題にもある難民キャンプ内でのアドボカシーをする人材リソースや定量的インパクトを測るための人材育成が不十分であり、運営現地化を建設的に進められてきていなかったことである。新規の事業実施においては、ナショナルスタッフの能力強化のために、一定期間、一定数の日本人職員(専門家)の投入を戦略的に考える必要がある。本事業では、日本人の図書館専門家が2年間配置されたものの、その後の人材育成、事業実施面においては困難があったと言え、事業形成時に専門家配置について深く議論する必要がある。

三つ目は、本事業で蓄積された難民状況下におけるコミュニティ図書館事業を他の地域の難民支援事業に活かすことである。世界には2億2200万人もの人的災害、自然災害のため、教育の機会を奪われた子どもや若者が存在する。このうち8割は5年以上、難民キャンプや避難所で暮らしている。コミュニティ図書館活動は他の危機状況下で暮らす子どもや若者、成人に求められている。

最後に、シャンティの発行するこの「教育と開発リサーチペーパー」シリーズを定期的に発行し、事業の記録を残しておくことが期待される。

9. 参考文献

渡邊有理子、2006、『図書館への道ービルマ難民キャンプでの1095日ー』、鈴木出版
公益社団法人シャンティ国際ボランティア会、2011、『図書館は、国境をこえる』、教育史料出版
会
久保忠行、2014、『難民の人類学 タイ・ビルマ国境のカレンニー難民の移動と定住』、清水弘文
堂書房

UNHCR Thailand. "Refugees in Thailand".

<https://www.unhcr.org/th/en/> (最終アクセス日:2023-8-7)

The Border Consortium

<https://www.theborderconsortium.org/> (最終アクセス日:2023-8-7)

CCSDPT. "Our Members"

<http://www.ccsdpt.org/#about> (最終アクセス日:2023-3-16)

Ready for. "ここだけが世界と繋がれる場所--難民キャンプの図書館を続けたい"

<https://readyfor.jp/projects/2018brc> (最終アクセス日:2023-5-10)

シャンティ国際ボランティア会ミャンマー(ビルマ)難民事業事務所活動ページ・ブログ

<https://sva.or.jp/activity/brc/> (最終アクセス日:2023-5-19)

シャンティ国際ボランティア会広報誌「Shanti」

<https://sva.or.jp/publication-category/newsletter/> (最終アクセス日:2023-5-19)

OCKENDEN INTERNATIONAL(オッケンデン賞受賞ページ)

<https://www.ockendenprizes.org/2023-prizes/shanti-volunteer-association/>

(最終アクセス日:2023-6-13)

10. 別添

別添1:事業年表

年	所長名	スタッフ数	事務所所在地	活動キャンプ	図書館数	蔵書数	図書館員数	TVV数	利用者数 (子ども)	利用者数 (大人)	貸出者数 (大人)
2000	三宅隆史	渡邊有理子 タイ人スタッフ3名(ドライ バー含む)	メーサリアン(9月 設立)	メコンカ、メラマルアン	-	-	-	-	-	-	-
2001	三宅隆史(～11月) 中原亜紀(11月～)	渡邊有理子、ナショナルス タッフ7名	メーサリアン メーソット(11月 からメインオフィ ス)	メコンカ、メラマルアン	6館	開館時の 蔵書は児 童書228 冊、成人 向け図書 188冊	各館2名	-			
				メコンカ	3館	児童書約 250冊 大人の本 222冊	各館2名、計6名		合計:59,630(3月～9月)		
				メラマルアン	3館	児童書約 250冊 大人の本 223冊	各館2名、計6名		合計:26,138(6月～9月)		
2002	中原亜紀	渡邊有理子、ナショナルス タッフ15名	メーサリアン メーソット	メラウ(旧名:メコンカ)、メラ マルアン、スボ、ウンビ アム、メラ	16館		各館2名				
				メラウ(旧名:メコンカ)	3館						
				メラマルアン	3館						
				スボ	2館						
				ウンビナム	3館						
				メラ	5館						
2003	中原亜紀	ナショナルスタッフ19名 *渡邊有理子氏帰任	メーサリアン メーソット カンチャナブリ	メラウ(旧名:メコンカ)、メラ マルアン、スボ、ウンビ ナム、メラ、パンドンヤン	18館		各館2名		合計:615,698	合計:115,029	
				メラウ(旧名:メコンカ)	3館	2,016冊					
				メラマルアン	4館						
				スボ	2館						
				ウンビナム	3館	1,774冊					
				メラ	5館						
				パンドンヤン	1館						

年	所長名	スタッフ数	事務所所在地	活動キャンプ	図書館数	蔵書数	図書館員数	TVV数	利用者数 (子ども)	利用者数 (大人)	貸出者数 (大人)
2004	中原重紀	ナショナルスタッフ21名	メーサリアン メーソット カンチャナブリ	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンピナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館		各館2名		合計：750,469	合計：155,057	
				メラウ(旧名:メコンカ)	3館	2,938冊			153,425	31,931	
				メラマルアン	4館				150,556	39,532	
				ヌボ	2館				16,430	10,966	
				ウンピナム	4館	5,845冊			72,918	16,884	
				メラ	5館				147,936	33,635	
				バンドンヤン	1館				116,283	5,774	
				タムヒン	2館				92,921	16,331	
2005	中原重紀	ナショナルスタッフ26名	メーサリアン メーソット カンチャナブリ	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンピナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	22館		各館2名		合計：837,158	合計：204,491	
				メラウ	3館	5,382冊			184,505	48,958	
				メラマルアン	4館				147,555	41,803	
				ヌボ	2館				34,214	17,081	
				ウンピナム	4館	9,202冊			44,921	15,459	
				メラ	6館				163,791	50,847	
				バンドンヤン	1館				163,811	7,726	
				タムヒン	2館				98,361	22,617	
2006	中原重紀	ナショナルスタッフ26名	メーサリアン メーソット カンチャナブリ	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンピナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	25館		各館2名	15歳～25歳の約20 名	合計：1,370,370		
				メラウ	4館	8,365冊					
				メラマルアン	5館						
				ヌボ	2館						
				ウンピナム	4館	12,167冊					
				メラ	6館						
				バンドンヤン	2館						
				タムヒン	2館						
2007	中原重紀(～8月) 小野豪大(4月～)	ナショナルスタッフ21名 パート職員4名	メーソット メーサリアン カンチャナブリ	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンピナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	25館		各館2名	各キャンプ約20名	合計：999,918		
				メラウ	4館						
				メラマルアン	5館						
				ヌボ	2館						
				ウンピナム	4館						
				メラ	6館						
				バンドンヤン	2館						
				タムヒン	2館						
2008	小野豪大	日本人1名(調整員5月～) ナショナルスタッフ20名 パート職員4名	メーソット メーサリアン カンチャナブリ	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンピナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	24館		各館2名	各キャンプ約20名	合計：789,714		
				メラウ	4館						
				メラマルアン	5館						
				ヌボ	1館						
				ウンピナム	4館						
				メラ	6館						
				バンドンヤン	2館						
				タムヒン	2館						

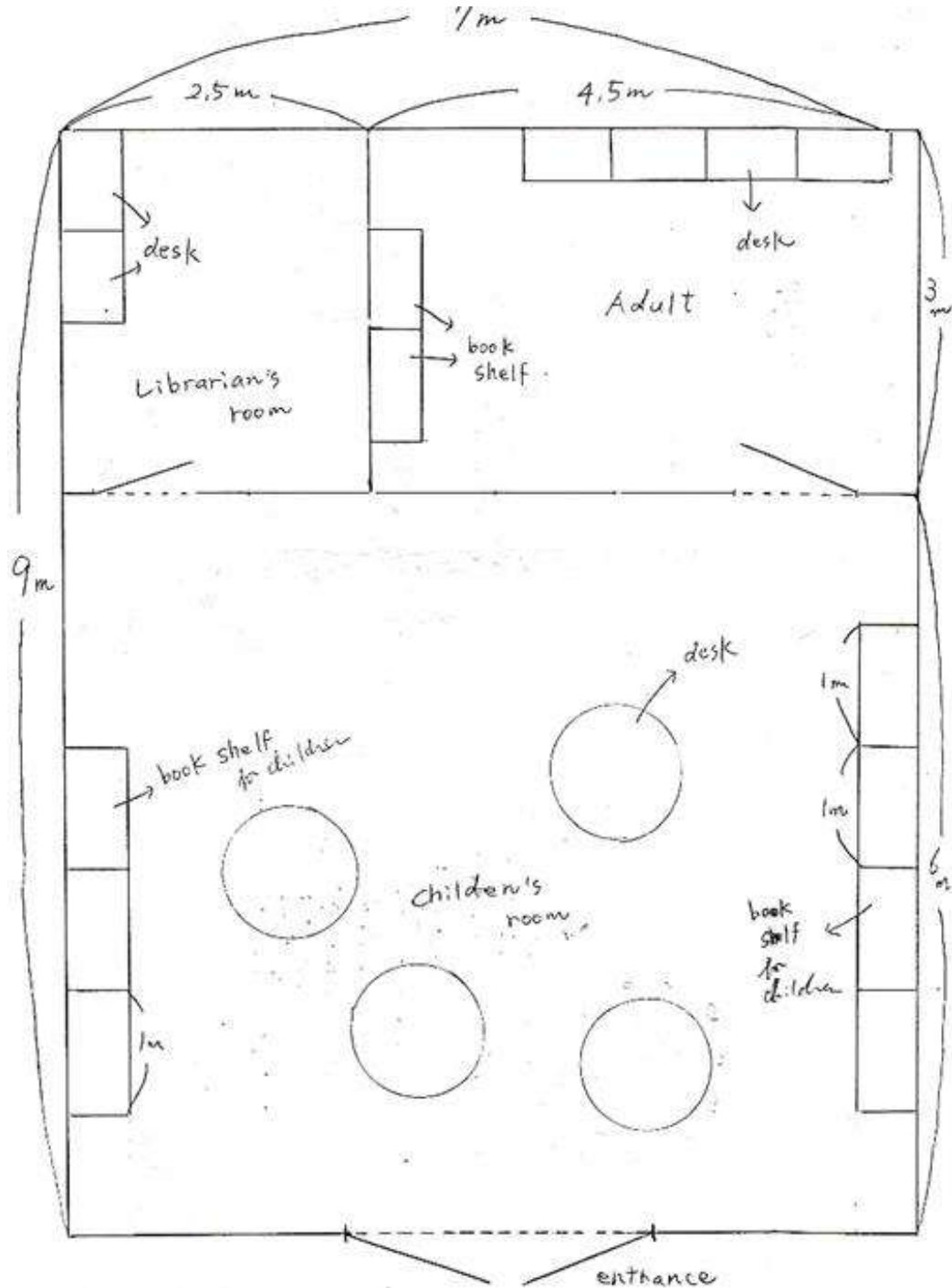
年	所長名	スタッフ数	事務所所在地	活動キャンプ	図書館数	蔵書数	図書館員数	TVV数	利用者数 (子ども)	利用者数 (大人)	貸出者数 (大人)
2009	小野豪大	日本人1名(調整員～1月、アドバイザー～5月～) ナショナルスタッフ22名	メーソット メーサリアン カンチャナブリ (12月末に事務所 閉鎖)	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンピナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	22館		各館2名	各キャンプ約20人 計140人	合計：610,836		
				メラウ	4館						
				メラマルアン	4館						
				ヌボ	1館						
				ウンピナム	3館						
				メラ	6館						
				バンドンヤン	2館						
				タムヒン	2館						
2010	小野豪大	日本人2名 ナショナルスタッフ18名	メーソット メーサリアン	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンピナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館	145,573	各館2名	79	合計：375,846	合計：223,687	合計：97,642
				メラウ	4館			12			
				メラマルアン	4館			12			
				ヌボ	1館			10			
				ウンピナム	3館			12			
				メラ	6館			13			
				バンドンヤン	1館			10			
				タムヒン	2館			10			
2011	小野豪大	日本人2名 ナショナルスタッフ15名	メーソット メーサリアン(6月 閉鎖)	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンピナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館	164,712	各館2名	78	合計：316,917	合計：230,979	合計：119,817
				メラウ	4館			12			
				メラマルアン	4館			12			
				ヌボ	1館			11			
				ウンピナム	3館			12			
				メラ	6館			11			
				バンドンヤン	1館			10			
				タムヒン	2館			10			
2012	小野豪大	日本人2名 ナショナルスタッフ15名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンピナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館	178,365 (～4月)	各館2名	147	合計：323,285	合計：215,916	合計：107,490
				メラウ	4館			22			
				メラマルアン	4館			20			
				ヌボ	1館			23			
				ウンピナム	3館			22			
				メラ	6館			20			
				バンドンヤン	1館			20			
				タムヒン	2館			20			

年	所長名	スタッフ数	事務所所在地	活動キャンプ	図書館数	蔵書数	図書館員数	TVV数	利用者数 (子ども)	利用者数 (大人)	貸出者数 (大人)
2013	小野豪大	日本人2名 ナショナルスタッフ14名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンビナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館		各館2名	150	合計：305,455	合計：197,662	合計：105,762
				メラウ	4館			22			
				メラマルアン	4館			21			
				ヌボ	1館			23			
				ウンビナム	3館			22			
				メラ	6館			22			
				バンドンヤン	1館			20			
				タムヒン	2館			20			
2014	小野豪大(～5月) 八木沢克昌(6月～)	日本人1名 日本人インターン1名 ナショナルスタッフ14名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンビナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館	236,844	42 (それ以外に図書 館担当8)	141	合計：280,152	合計：174,794	合計：89,769
				メラウ	4館	35,623	8	20	60,111	44,682	11,169
				メラマルアン	4館	79,332	8	20	48,139	26,335	12,771
				ヌボ	1館	11,544	2	20	21,130	23,908	32,020
				ウンビナム	3館	32,485	6	21	28,053	18,302	9,066
				メラ	6館	56,871	12	20	91,601	48,528	19,295
				バンドンヤン	1館	6,882	2	20	13,455	4,786	2,277
				タムヒン	2館	14,107	4	20	17,663	8,253	3,171
2015	八木沢克昌	日本人1名 日本人インターン1名 ナショナルスタッフ13名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンビナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館		42 (それ以外に図書 館担当8)	172	合計：276,224	合計：159,220	合計：78,478
				メラウ	4館			8	45,332	38,243	8,257
				メラマルアン	4館			8	51,756	25,304	14,564
				ヌボ	1館			2	19,801	22,913	27,888
				ウンビナム	3館			6	24,423	12,272	6,179
				メラ	6館			12	84,222	39,557	16,192
				バンドンヤン	1館			2	12,653	5,119	2,319
				タムヒン	2館			4	38,037	15,812	3,079
2016	八木沢克昌	日本人1名 日本人インターン1名 ナショナルスタッフ12名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンビナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館	263,665	42 (それ以外に図書 館担当8)	172	合計：262,376	合計：152,478	合計：76,563
				メラウ	4館	58,488	8	20	51,265	41,536	8,183
				メラマルアン	4館	67,233	8	20	45,955	21,364	13,846
				ヌボ	1館	14,873	2	36	21,925	23,163	30,192
				ウンビナム	3館	32,897	6	36	22,251	11,181	5,649
				メラ	6館	62,470	12	20	69,571	36,068	12,746
				バンドンヤン	1館	9,963	2	20	15,368	5,676	2,744
				タムヒン	2館	17,740	4	20	36,041	13,490	3,203
2017	八木沢克昌	日本人1名 日本人インターン1名 ナショナルスタッフ14名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンビナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館	244,501	42 (それ以外に図書 館担当8)	194	合計：241,897	合計：152,445	合計59,507
				メラウ	4館	41,667	8	30	56,433	40,093	5,678
				メラマルアン	4館	57,635	8	24	37,071	18,326	6,947
				ヌボ	1館	15,983	2	28	20,285	27,061	28,597
				ウンビナム	3館	30,334	6	32	22,394	11,189	1,512
				メラ	6館	65,177	12	40	72,195	40,930	11,952
				バンドンヤン	1館	12,038	2	20	12,621	6,504	2,208
				タムヒン	2館	21,667	4	20	20,898	8,342	2,613

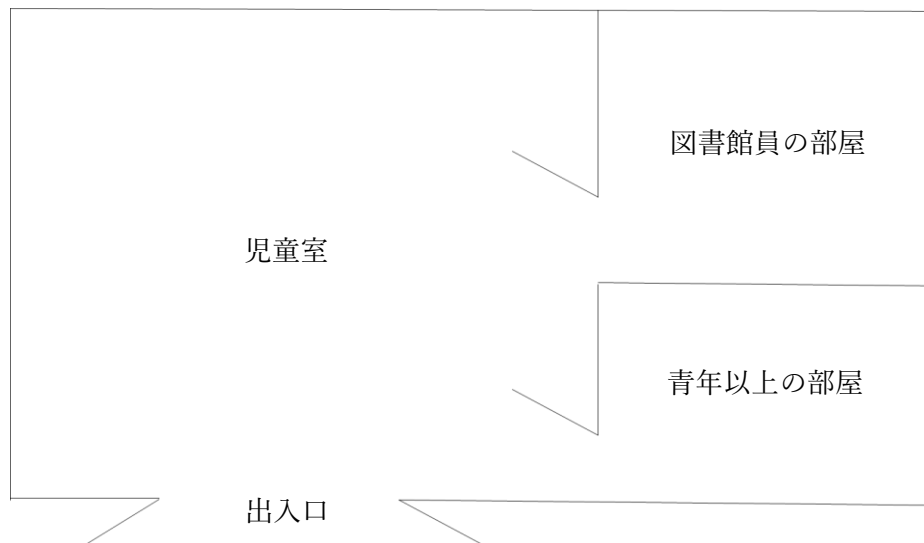
年	所長名	スタッフ数	事務所所在地	活動キャンプ	図書館数	蔵書数	図書館員数	TVV数	利用者数 (子ども)	利用者数 (大人)	貸出者数 (大人)
2018	八木沢克昌	日本人1名 日本人インターン1名 ナショナルスタッフ14名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンビナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	21館	264,101	42 (それ以外に図書 館担当8)	205	合計：225,183	合計：154,265	合計59,800
				メラウ	4館	40,065	8	30	59,169	32,476	5,224
				メラマルアン	4館	58,046	8	25	36,357	19,480	6,595
				ヌボ	1館	15,231	2	34	19,634	25,159	27,580
				ウンビナム	3館	29,625	6	32	26,646	17,027	4,555
				メラ	6館	71,208	12	42	85,262	46,048	12,349
				バンドンヤン	1館	14,800	2	21	13,767	7,175	1,455
				タムヒン	2館	35,126	4	21	14,348	7,900	2,042
2019	中原重紀(兼任)	日本人インターン1名 ナショナルスタッフ8名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンビナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	15館 (4月から)	206,128	30	103	合計：190,595	合計：115,296	合計：49,814
				メラウ	3館	36,256	6	18	50,567	28,592	5,206
				メラマルアン	3館	47,422	6	18	29,702	14,022	5,783
				ヌボ	1館	16,612	2	15	17,742	21,078	26,926
				ウンビナム	2館	20,965	4	12	20,269	14,053	2,585
				メラ	4館	48,577	8	16	50,340	25,976	7,972
				バンドンヤン	1館	16,407	2	16	11,828	5,615	480
				タムヒン	1館	19,889	2	8	10,147	5,960	862
2020	中原重紀(兼任)	ナショナルスタッフ8名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンビナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	15館	212,002	30	92	合計：111,402	合計：68,599	合計：39,571
				メラウ	3館	36,284	6	18	29,584	18,285	2,459
				メラマルアン	3館	44,417	6	18	14,977	7,579	3,968
				ヌボ	1館	17,505	2	10	15,762	16,207	25,621
				ウンビナム	2館	22,620	4	12	10,114	6,500	1,471
				メラ	4館	66,147	8	16	23,688	11,737	4,908
				バンドンヤン	1館	14,846	2	10	9,921	5,181	327
				タムヒン	1館	10,183	2	8	7,356	3,110	997
2021	中原重紀(兼任)	日本人1名(ER担当) ナショナルスタッフ7名	メーソット	メラウ、メラマルアン、ヌ ボ、ウンビナム、メラ、バン ドンヤン、タムヒン	15館	215,649	30	99	合計：75,582	合計：43,220	合計：10,578
				メラウ	3館	36,649	6	18	19,871	12,631	1,696
				メラマルアン	3館	55,148	6	18	14,957	6,462	2,648
				ヌボ	1館	18,595	2	10	8,147	8,997	639
				ウンビナム	2館	24,713	4	12	7,751	3,687	1,156
				メラ	4館	52,388	8	16	11,485	5,072	3,053
				バンドンヤン	1館	17,182	2	15	10,552	5,054	1,079
				タムヒン	1館	10,974	2	10	2,819	1,317	307

別添 2: 図書館の室内設計

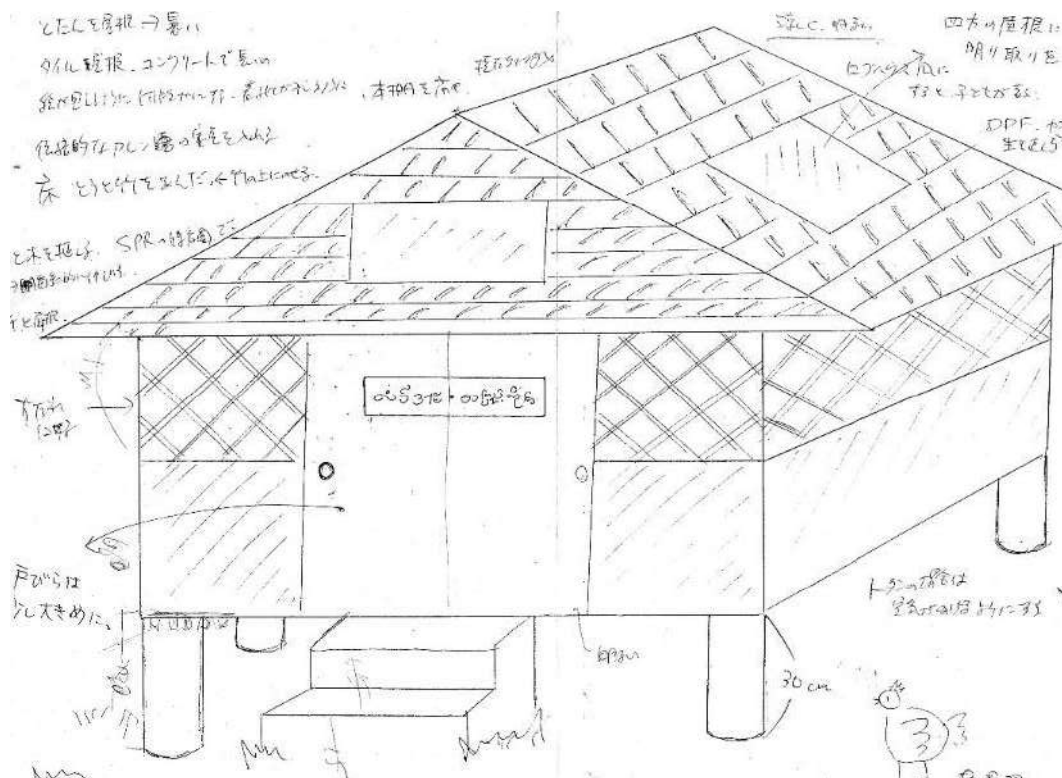
【1年目の室内設計】

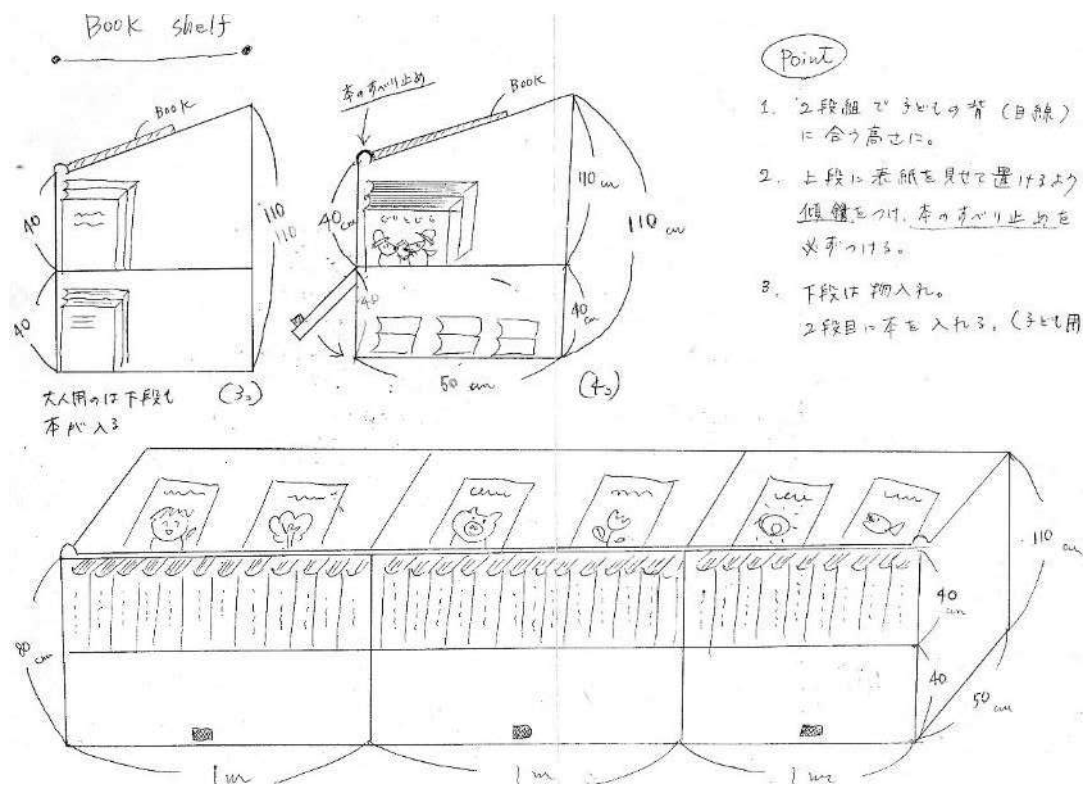
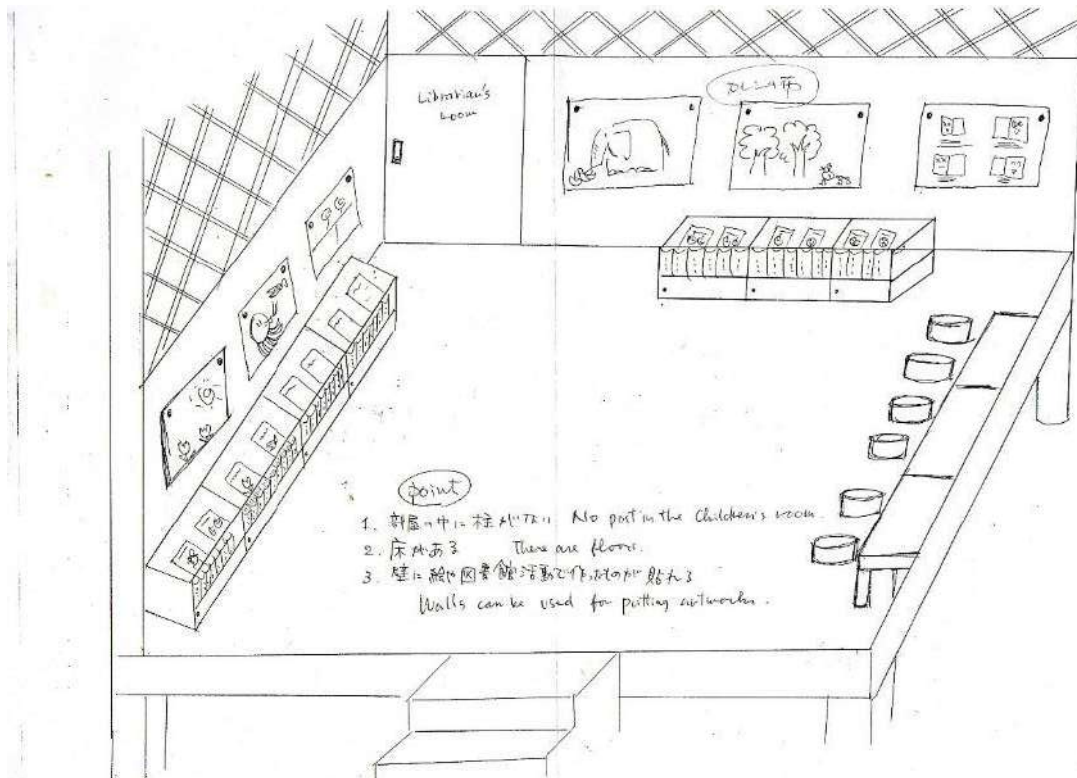


【2年目の室内設計】青年以上の心理を考慮した設計へ

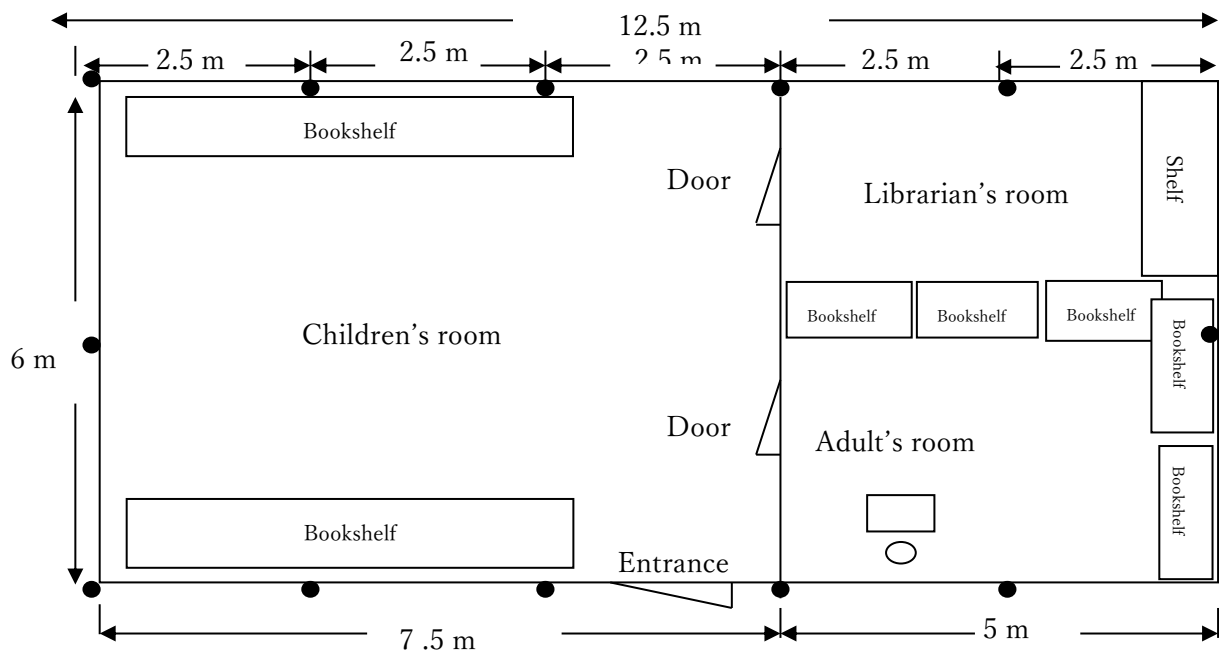


渡邊専門家による図書館・室内・本棚設計図





近年の図書館の室内図面(2014 年時点、メラ難民キャンプ図書館)



別添 3:「図書館の詩」ポサクレ(当時 10 歳/メラマルアン難民キャンプ在住)

ぼくは図書館が大好き
世界でいちばんだいすき
とても悲しい気持ちのとき
図書館に行くといつも気持ちが軽くなる

図書館の中にはたくさんの本がある
本の中にはたくさんの知識がつまっていて
多くの知らないことを知ることができる
毎日ぼくは学校が終わると、走って図書館に行く

図書館に行くと幸せな気持ちになれるから
自然と笑顔になれるから
図書館で知ったことは、
ぼくの人生にとって金のように光り輝く

どうか図書館がぼくのそばからなくなきませんように
ぼくに未来の希望を与えてくれる場所だから
ぼくは世界でいちばん、図書館が好き

別添 4: 図書館研修内容(初期・現在)

1. 渡邊専門家による初期の図書館活動・基礎ワークショップ(開館前)

対 象: 難民キャンプの図書館員

目 的: これから開館する図書館活動で、図書館員として必要な理論と基本的な技能の習得

<図書館活動マニュアル>

	目次の項目	主な内容
1	図書館について	図書館に必要な三大要素、建物、資料(本)、人(図書館員)の解説から、生涯学習の場として、公共図書館のもつ機能を説明。また、ユネスコ公共図書館宣言の、すべての人々に平等に無料で公開されるという、基本的な理念を解説。
2	図書館員の仕事について	三大要素のなかで、とりわけ人(図書館員)のはたす役割と、重要性について。また、児童図書館員に必要な三つのポイント①本に関する知識 ②子どもに関する知識 ③子どもと本を結びつける技術について解説。
3	お話の世界について	子どもたちにお話の世界がもたらす効用と、お話を伝える代表的な5つの種類について。また、母語でお話を聴くことの意義について解説。
4	子どもの心理発達	乳幼児から小学生にかけて、年齢ごとの基本的成長リズムを学ぶ。その成長にあわせた絵本の与え方と、子どもたちへの接し方について。
5	絵本の選書	児童図書館員としての選書のポイントについて。また、難民キャンプの図書館のために選書された絵本には、どのようなテーマをもつ絵本があるのかを学ぶ。
6	素話について	児童への素話(語り)のしかたについて、実演練習をおこなう。
7	絵本の読み聞かせ	絵本の読み聞かせのやりかたについての実技練習。声のだししかた、絵本の持ち方などを身につける。
8	紙芝居について	紙芝居の歴史とその特徴を学び、実技練習をおこなう。
9	図書館員の一日の具体的業務	朝の開館から閉館まで、一日の具体的な業務について説明。また、「図書館日記」の記入の仕方について。
10	蔵書の管理と貸し出し業務	蔵書の管理と、12歳以上への貸し出し業務について。利用者登録カードの作成、貸し出しノートへの記入のしかたなど。
11	移動図書館活動	図書館から遠く、利用することが困難な児童のために、幼稚園、保育園、小学校に絵本のセットを貸出しする。その具体的な作業について。

12	図書館における文化活動	民族の伝統文化が次世代に継承されるべく文化活動の実施について。①絵画教室 ②工作教室(折り紙、紙工作など) ③音楽教室(歌、民族舞踊、伝統楽器)など、具体的な事例を説明。
----	-------------	---

* 上記内容を、図書館が開館する前に三日間にわたって実施。

2. 渡邊専門家による初期の図書館活動で実施したワークショップ(開館後)

対 象: 難民キャンプの図書館員(項目によっては、幼稚園、小学校の教員、カレン女性グループ)

目 的: 開館後の活動で、さらなる図書館活動の技能と子どもの成長について学び、活動に活かす

	研修項目	主な内容
1	本の補修のしかた	児童書と成人向け図書の破損時の補修のしかた。背表紙、内部破損等。
2	新聞での工作・リサイクルパズルの作成	新聞やダンボール、などリサイクル品を用いての工作。
3	手作り製本のしかた	出版に至らない作品の数々も、手作り製本(折り本)にすることで、蔵書の一冊とすることは可能。その製本のしかたを学ぶ。
4	ペープサートの制作と実技	画用紙と2本の割り箸を用いた巻き込み式ペープサートと、ダンボールの舞台を体に着けて演じるボックス型ペープサートの製作と実技。
5	パネルシアターの制作と実技	サンドペーパーまたはマジックテープを取り付けたキャラクターをボードに張りながらお話を語る手法の練習。
6	集団での歌と遊びについて	童謡やわらべ歌、手遊びを集団で指導するための手法と実技練習。
7	紙芝居制作について	紙芝居の特性を学び、
8	紙漉き	バナナの葉や幹など、身近にある植物を用いての紙を作り出す技術を学ぶ。
9	教科書教材の改訂版制作	現在キャンプで使われている教科書を吟味し、病気、健康、生活、栄養、将来の夢など10章にわたる教科書のドラフト作成を行う。
10	謄写版の使い方とその活用	電気をしない謄写版の使い方を身につけ、今後の活用について学ぶ。
11	図書館新聞づくり	新聞とはどのようにするのか。レイアウト、表題、取り上げる記事の内容などについて。
12	タイにおける児童書の出版について	タイの児童書出版に長年携わった経験をもつ方から、直接タイの児童書出版の現状を聞く。
13	乳幼児への絵本の与え方	乳幼児の特性と、図書館での絵本の与え方について。
14	手作りのコラージュ絵本作成	広告の絵柄などを用いて貼り付ける、手作り絵本の作成

15	生きる力についてのワークショップ	プログラムを通じて、学び方を学び、自分の感情と、人とのコミュニケーションのあり方と役割の取り方に気づく。
16	本の分類について	十進分類法の説明と表示のしかた
17	「子どもの権利条約」の絵本の活用	子どもの権利とは具体的にどのような権利があるのかを学び、絵本への理解を深める

* 上記内容は、開館後の現職研修として、定期的実施。

3. 渡邊専門家による初期の図書館事業スタッフ・講習プログラム

対 象：事務所に勤務する図書館事業スタッフ

目 的： 1. 子どもの発達にとって良質な絵本はいかなる本のことをいうのか。また長年読み継がれてきた絵本にこめられたメッセージを感じ取り、図書館に配布した絵本の意義を把握する。

2. 専門家が帰国後に、自ら図書館員へ指導や講義ができるようにする。

3. 障害児むけの絵本について学ぶことで、さまざまな形態の絵本への関心を高めると同時に、「すべての人に」という公共図書館の原点を再確認する。

4. 自ら絵本や図書館活動について学ぶ心を養う。

	研修項目	主な内容
1	世界の絵本の歩み ～黄金期から今日まで～	図書館に選書をした絵本は、古い作品では約80年間も読み継がれている。こうした絵本が今日にいたるまでの歴史をたどる。
2	絵本にこめられたメッセージ ～子どもたちに伝えたいこと～	絵本の世界の主な作家や画家を紹介しながら、絵本にこめられたメッセージの奥深さについて考える力を養う。
3	主食絵本とおかし絵本 ～良質な絵本と安易な絵本～	子どもにとってどのような絵本がより思考と想像の発達と育成に役立つのかを、同じ民話をもとにした二種類の絵本をもとに解説する。
4	絵本の種類 ～科学絵本・環境絵本～	絵本には想像力を養うファンタジーのほかに、科学絵本や知識絵本、赤ちゃん絵本などさまざまある。こうした絵本の分野について学ぶ。
5	絵本の見方とそのポイント ～構図と色彩の効果～	絵本のさまざまな画法について学び、質の高い絵本がどのような構図と色彩で描かれているのかを理解する。
6	障害児むけの絵本 ～点字本、さわる絵本、布の絵本から～	さまざまな形態をもつ絵本が登場しているが、そのなかでも障害をもつ子どもたち向けに考案されたさまざまな絵本を実際に目にする。
7	本にも住所がある ～本の分類について～	キャンプ図書館の蔵書は増加傾向にあり、将来的に分類して配架すること見据えて、図書の分類についてふれる。
8	タイの絵本出版状況	世界の絵本出版状況と、母国タイの絵本の出版状況

	～自分の国の絵本って？～	を知り、今後絵本を購入する際の参考とする。
9	本の流通と出版 ～着想から本棚に届くまで～	1冊の本が着想してから、図書館や書店に並ぶまでの流れを知り、いかに多くの人の手を経てできあがってくるのかを知る。
10	子どもの権利条約の絵本 ～意義とその使用法～	出版と配布が予定されている「子どもの権利条約」の絵本。この絵本を配布する意義と使用法について。
11	絵本の研究①	図書館の絵本の中から、自分で気に入っている1冊を選び、そこにこめられたメッセージや技法について研究と発表をおこなう。
12	絵本の研究②	同 上

＊2002年から2003年にかけて、定期的におこなわれた連続講習

4. 渡邊専門家による初期の図書館事業スタッフ・講習プログラム

対 象：事務所に勤務する図書館事業スタッフ

目 的：1. 新人の図書館スタッフをむかえ、図書館活動の意義と良書を選ぶ視点の再確認をおこなう

2. これまでのワークショップで作りに上げてきた材料（パネルシアターやペープサートの舞台）を活用して、さらに新しい題材に挑戦し、図書館員に指導できるようにする。

3. マンネリ化したモニタリングの改善

	研修項目	概 要
1	良書選書の視点	基本的な良書の概念の再確認と、選書のポイントについて学ぶ。理論に加え、実際に絵本を見ながら選書の実践を体験する。
2	絵本の読み聞かせ	図書館事業スタッフの読み聞かせを見せてもらい、実技アドバイスをもらう
3	本の分類	大人の本の分類については、以前おこなっているが、今回は、実際に1箇所の図書館ですべての本を分類し、いかに表示をするべきなのかをスタッフ全員で体験し、モデル図書館をつくる。
4	新聞の工作&カードゲーム	図書館員が子どもたちに容易に教えられるような新作を習得する。
5	パネルシアター&ペープサート	すでにボードがあるため、これを利用した新しい作品の製作と実演練習にとりくむ。
6	館内の装飾について	子どもたちと図書館員がともにつくる館内の装飾と表示の仕方を学ぶ
7	謄写版でのニュース作り	基礎的な新聞作りについて学ぶ。また、図書館の利用案内の

	のワークショップ	作成についても指導。
8	子どもの本の著作権	海外の絵本の著作権についての重要性と基本的概念を学ぶ
9	モニタリングと モニタリングシートの改 善	モニタリングに付き添い、スタッフの図書館員へのアドバイス 状況を視察。またマンネリ化したモニタリングシートを見直し、 現状にみあった内容に改善する。
10	今後の活動について	図書館スタッフが現在抱えている活動状の問題点や改善案を だしあい、今後の図書館活動のありかたについて討議。

* 上記内容は、2005 年再訪時におこなったワークショップ。図書館事業スタッフに新規メンバーが増えたため、過去におこなった研修内容と、一部重複がある。

5. 現在の図書館員現職研修

2019 年以降は研修として時間を取るのではなく、四半期会議の時間を活用し必要な知識共有の時間を適宜作るようにしているため、2018 年が最新となる。

研修講師：シャンティナショナルスタッフ

必要日数：2 日間

目的と概要：

1. 図書館関連マニュアルの理解を深める
2. 様々な道具を活用した読み聞かせについて知識と技術を得る
3. 子どもたちに向けた新しい歌を習得する
4. 子どもたちを対象にした図書館で実施するゲームをどのように実施するか復習する
5. おはなし会についての知識と技術を得る
6. 図書館における情報共有機能について理解する
7. 図書館内の装飾やおりがみについての知識と技術を得る
8. 図書館の基本サービス(利用規定や図書館員が記録するデータについて)の基礎的な知識を得る
9. 継続的な図書館活動実施について話し合う

	研修項目	概要
1	図書館関連マニュアル説明	各図書館に配布している図書館員マニュアルと移動図書箱マニュアルについて学ぶ
2	読み聞かせ①	パネルシアター、舞台式ペーパーパペットシアター、紙芝居を利用した読み聞かせ手法を学ぶ

3	手遊び・歌	子どもたちと一緒に新しい手遊びや歌を学ぶ
4	読み聞かせ②	ペープサート、エプロンシアターを利用した読み聞かせ手法を学ぶ
5	おはなし会の実施	おはなし会のプログラムについて研修講師による実演を交え学ぶ
6	おりがみ*	図書館内の装飾をおりがみで作る方法、こどもたちが取り組める簡単なおりがみを学ぶ
7	コミュニティ図書館における情報共有機能**	パソコンの使い方、情報掲示板の更新方法、どのような情報を掲示したら良いかを学ぶ
8	コミュニティ図書館について	コミュニティ図書館の規則、本の管理方法、清掃を通じた環境管理について学ぶ
9	図書館活動記録、データの収集方法	図書館活動記録の記録方法、利用者人数といったデータの収集方法と記録方法を学ぶ
10	今後の図書館活動について	今抱えている課題の解決方法、シャンティからの資金提供が縮小する 2019 年以降の活動継続方法について議論する

* 図書館内にはおりがみに関する本が置いてあるので、研修講師はその本について参加者に紹介する。

** 研修講師はパソコンに保管している歌や読み聞かせのビデオについて紹介する。図書館内のパソコン管理をしている人は、図書館関係者の交流会を行う時にビデオを紹介するようにする。

6. 現在の教員向け読書推進研修

研修講師：シャンティナショナルスタッフ

必要日数：保育園・小学校教員向けに 1 日、中学・高校教員向けに 1 日

目的と概要：

＜保育園・小学校教員向け＞

1. 読み聞かせの基本技術と様々な読書活動を習得する
2. 2019 年以降の移動図書箱サービスの効果的な実施方法と連携方法について議論する
3. 図書館マニュアルの活用方法を理解する

＜中学・高校教員向け＞

4. コミュニティ図書館と学校の連携方法について検討する
5. 2019 年以降の移動図書箱サービスの効果的な実施方法と連携方法について議論する
6. 図書館マニュアルの活用方法を理解する

<保育園・小学校教員向け>

	研修項目	概要
1	読み聞かせの実演	絵本とパネルシアターを使った読み聞かせを講師が実演し理解を深める
2	読み聞かせの力	読み聞かせが持つ力について学ぶ
3	読み聞かせ手法の紹介	図書館で実施しているペープサート、紙芝居、大型絵本、手袋シアター、素話といった読み聞かせ手法から少なくとも3つを紹介する
4	<グループ1:一般教員> おりがみ <グループ2:学校図書館担当教員> 図書館の本の管理	おりがみを使った装飾の作り方や子どもへの活動について学ぶ 学校図書館の本の管理(本の登録や分類)を学ぶ
5	移動図書館サービス	配布した移動図書館マニュアルに沿い、利用方法、規則、必要な書類について学ぶ
6	参考図書と今後の移動図書館サービス	図書館にある学生向け参考図書について紹介し、移動図書館サービスでのみ貸出可能な向けを説明。2018年の移動図書館サービスの計画について共有し、改善点等を議論する。2019年以降の連携について、同時に協議を行う

<中学・高校教員向け>

	研修項目	内容
1	移動図書館マニュアル説明	配布した移動図書館マニュアルに沿い、利用方法、規則、必要な書類について学ぶ
2	図書館の蔵書紹介	図書館にある蔵書(参考図書を含む)を紹介し、フィードバックをもらう
3	本の管理方法①	本の管理方法(本の登録、分類、修繕方法等)について学ぶ
4	本の管理方法②	本の登録、分類を実践する
5	今後の移動図書館サービス	移動図書館サービスの利用状況を確認し、サービスの改善点等を議論する。2019年以降の連携について、同時に協議を行う

別添 5: 図書館建設・改装・修繕記録(2001 年～2014 年)

地域	キャンプ名	図書館	年度													
			2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
メーサリアン	メラウ	1	N			R			R*				F			c, w
		2	N			F						R*F				
		3	N			F							R*F			
		4				N							R*F			
	メラマルアン	1	N					R			R*		F			c
		2	N					R*					F			c
		3	N										R*F			
		4			N							R*F				
メーソット	ヌボ	1		N					R*		F		E*			r, w
	ウンピアム	1		N					R*		F					c
		2		N					R*		F				BR	c
		3				N							R*F			
	メラ	1		N									R*F			
		2		N					R*		F					c
		3		N					R*		F					c
		4		N									R*F			
5			N									R*F				
	6					N		R*		F					c	
カンチャナブリ	バンドンヤン	1			N								R*F			
	タムヒン	1				N					R*		F			
		2				N					R*		F			
図書館数		21														

【備考】

- N=Newly established(新規建設), R=Fully Renovated(全面改装), R*=Renovated to permanent(恒久資材による改装), E=Enlarge adult room(大人の部屋の拡張), F=Permanent fence(恒久フェンス), BR=big repair(大規模修繕), c=ceiling(天井), w=wall(壁), r=roof(屋根)
- 2014 年以降は小規模修繕を毎年実施している。

別添 6: 出版絵本リスト(2001 年～2022 年)

番号	出版年	タイトル	印刷冊数	言語	備考
1	2001	Henry and special friend (HIV/AIDS awareness book)	1,000	カレン語	
2	2001	Paper Folding Manual 1	1,000	ビルマ語	
3	2002	Folktales from Asia	1,000	カレン語	マニュアル本
4	2002	I wonder why tummy rumbles and other questions about my body	1,000	ビルマ語	民話
5	2002	I wonder why the wind blows and other questions about the earth	1,000	カレン語	
6	2002	Child Right	1,000	ビルマ語	
7	2002	Paper Folding Manual 2	1,000	カレン語	マニュアル本
8	2002	Game Manual	1,000	ビルマ語	マニュアル本
9	2002	Karen Folktales 1	1,000	カレン語	民話
10	2002	What Do You Like To Eat?	500	ビルマ語	
11	2003	Ethnic Folktales of Myanmar (Drum Publication)	500	カレン語	民話
12	2003	Paper Folding Manual 3	1,000	ビルマ語	マニュアル本
13	2003	How to tell stories	200	カレン語	マニュアル本
14	2003	Karen Folktales 2	200	ビルマ語	民話
15	2003	Paper Folding Manual 1 (Reprint)	1,000	カレン語	民話
16	2004	The Orphan and his Grandmother	500	ビルマ語	マニュアル本
17	2004	The Heron and Tortoise	500	カレン語	民話
18	2004	Everyone can help in their own way	500	ビルマ語	民話
19	2004	The Rabbit and Crocodile	500	カレン語	民話
20	2004	Karen Folktales 3	500	ビルマ語	民話
21	2005	The elephant and the tiger	500	カレン語	民話
22	2005	Karen Folktales 4	500	ビルマ語	第一回絵本出版コンテスト作品
23	2005	Paper Folding Manual 4	780	カレン語	民話
24	2005	Game Manual 2	720	ビルマ語	民話
25	2005	Tar (Karen Poem)	750	カレン語	マニュアル本
26	2006	The Rabbit King	775	ビルマ語	マニュアル本
27	2006	An orphan and his clever wife	760	カレン語	高年齢者活動にて収集
28	2006	Tar (Karen Poem) 2	760	ビルマ語	高年齢者活動にて収集
29	2006	Conflict between Saw Tu Tu and Master Sun	570	カレン語	高年齢者活動にて収集
30	2006	Gwar La Field	1,000	カレン語	民話(高年齢者活動にて収集)
31	2006	A Crane and a Cat	1,000	ビルマ語	民話(高年齢者活動にて収集)
32	2006	The four brothers	1,000	カレン語	民話(高年齢者活動にて収集)
33	2006	Karen Folktales 5	1,000	ビルマ語	民話(高年齢者活動にて収集)
34	2007	Child Rights For Primary School	800	カレン語	
35	2007	Child Rights For Middle School	800	ビルマ語	
36	2007	Child Rights For High School	800	カレン語	
37	2007	An Orphan and his Wizard Friend	800	ビルマ語	
38	2007	A Poor Orphan	1,000	カレン語	民話(タムヒンキャンプ高年齢者活動にて収集)
39	2008	Wah Wah Poh wants to learn	1,000	ビルマ語	民話(タムヒンキャンプ高年齢者活動にて収集)
40	2008	A group of fishes	1,000	カレン語	ワンピラムキャンプ絵本出版コンテスト作品
41	2008	Snail prience	1,000	ビルマ語	メラマルアンキャンプ絵本出版コンテスト作品
42	2008	Fox Family	1,000	カレン語	民話(メラマルアンキャンプ高年齢者活動より収集)
43	2008	Gift of father	1,575	カレン語	民話(メラマルアンキャンプ高年齢者活動より収集)
44	2009	Four friends	1,000	ビルマ語	タムヒンキャンプ絵本出版コンテスト作品
45	2009	White Dove	1,000	カレン語	民話(メラマルアンキャンプ高年齢者活動より収集)

46	2009	The bird toward peace	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話(メラルアンキャンプ高齢者活動より収集)
47	2009	An orphan and his grandma	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
48	2009	Two princesses	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
49	2010	A thief who told the truth	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話(メラルアンキャンプ高齢者活動より収集)
50	2010	The greatest cheat	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話(メラルアンキャンプ高齢者活動より収集)
51	2010	Karen folktale 6	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話(高齢者活動にて収集)
52	2010	Karen folktale 7	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話(高齢者活動にて収集)
53	2010	Unity makes forest safe	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	絵本出版コンテスト作品(おはなし:ヌボキャンプ、絵:ウンビ ムキャンプ)
54	2011	Big Eyes	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
55	2011	The moon the witness	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
56	2011	Karen folktale 8	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
57	2011	Ethnic groups in Burma	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
58	2011	Together for better world	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	絵本出版コンテスト作品(おはなし:ヌボキャンプ、絵:ウンビ ムキャンプ)
59	2011	Seven sister stars	200 (B, K, E)	ビルマ語、カレン語、英語にて出版	民話(ビルマ語、カレン語、英語にて出版)
60	2012	Miss Big Buttock	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	
61	2012	The Greatest Love	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
62	2012	The Happy Valley	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	絵本出版コンテスト作品(おはなし:バンドンヤンキャンプ、絵: ヌボキャンプ)
63	2012	Humorous Stories	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	創作絵本
64	2012	Karen Folktale(Vol.9)	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
65	2013	The White Chicky	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
66	2013	Do you want to eat furits?	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	写真集
67	2013	New life from father	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	ヌボキャンプ絵本出版コンテスト作品
68	2013	Student Book (Burmese subject Grade 3)	3,000	ビルマ語	KRCEE発行教科書
69	2013	Teacher Guide Book (Burmese subject Grade 3)	400	ビルマ語	KRCEE発行教科書
70	2013	Student Book (Burmese subject Grade 4)	3,000	ビルマ語	KRCEE発行教科書
71	2013	Teacher Guide Book (Burmese subject Grade 4)	400	ビルマ語	KRCEE発行教科書
72	2013	Student Book (Burmese subject Grade 5)	3,000	ビルマ語	KRCEE発行教科書
73	2013	Teacher Guide Book (Burmese subject Grade 5)	400	ビルマ語	KRCEE発行教科書
74	2014	None of our Business	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
75	2014	The King Eats Husks	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
76	2014	A Small village become to town (picture context)	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	絵本出版コンテスト作品(おはなし:バンドンヤンキャンプ、絵: ウンビムキャンプ)
77	2014	Student Book (Karen subject Grade 1)	5,000	カレン語	KRCEE発行教科書
78	2014	Teacher Guide Book (Karen subject Grade 1)	400	カレン語	KRCEE発行教科書
79	2014	Student Book (Karen subject Grade 2)	5,000	カレン語	KRCEE発行教科書
80	2014	Teacher Guide Book (Karen subject Grade 2)	400	カレン語	KRCEE発行教科書
81	2015	Wisdom Gives Freedom	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
82	2015	The Duty of Clock's Hands	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	創作絵本
83	2015	A Bear With His Friends	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	絵本出版コンテスト作品(おはなし:タムヒンキャンプ、絵:メ ラキャンプ)
84	2015	Student Book (Karen subject Grade 3)	5,000	カレン語	KRCEE発行教科書
85	2015	Teacher Guide Book (Karen subject Grade 3)	500	カレン語	KRCEE発行教科書
86	2016	Karen Months, I love	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	創作絵本
87	2016	Libraries to Know Life	1,000	K/B	写真集(カレン語、ビルマ語で出版)
88	2017	Student Book (Karen subject Grade 3)	5,000	カレン語	KRCEE発行教科書
89	2017	Teacher Guide Book (Karen subject Grade 3)	500	カレン語	KRCEE発行教員ガイドブック
90	2017	Take Care of Our Earth	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	創作絵本
91	2017	The Little Girl, Paw Mu Khah	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	民話
92	2018	Student Book (Karen subject Grade 5)	5,000	カレン語	KRCEE発行教科書
93	2018	Teacher Guide Book (Karen subject Grade 5)	400	カレン語	KRCEE発行教科書
94	2018	Student Book (Karen subject Grade 6)	5,000	カレン語	KRCEE発行教科書
95	2018	Teacher Guide Book (Karen subject Grade 6)	400	カレン語	KRCEE発行教科書
96	2018	What Can You Do?	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	創作絵本
97	2019	Don't Go That Way!	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	創作絵本
98	2020	I Won't Act Like That Again	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	防災
99	2021	I Am In Trouble	1,000 1,000	カレン語 ビルマ語	実話を基にした創作絵本

別添 7:メディア掲載記事

2000 年 12 月 14 日 朝日新聞

記者の目

10月中旬から1
月間、タイ・ミ
ヤンマー国境沿
いに点在する難民キ
ャンプを取材し
た。ミヤンマー軍
事政権の弾圧を逃
れて、タイに流出
した難民は、タイ
政府が認定しただけで約10万
人。ほとんどが、カレン人な
どの少数民族。民族紛争の
激化により、難民流出が本格
化して20年近く。キャンプ生
話の長期化で、難民は支援に甘
え、NGO（非政府組織）の
援助活動にも慣性による馴れ
が見えた。食料などのモノの
支援だけでなく、難民に自立
心を取り戻せるような、新
たな援助のあり方を模索する
ことが必要だと感じた。

タイ中部部、3万人以上の
カレン人難民を収容する最大の
キャンプ、メラの難民学校で、
高校生とメラの週末テストを
見せてもらい、思わず首をかし
げた。

印刷は日本で市販されている
ものと変わらないほどきれい
だが、穴埋め式の英文の設
問は、米軍が南北戦争に
関するものばかり。職員室の
時刻表に「カレンの職員」
はなかった。学校は「国際N
GO」を建て、運営され、教師

には若い米国人が立つ。
「民族の歴史は教えない
のか」と聞くと、「カレン
語の授業の中で教える」と
とカレン人難民の校長は困っ
た顔ををした。

メラ・キャンプの中心部には、
難民たちが独自で作った
「商店街」がある。難民の中
には、こっそりキャンプを抜
け出し、都市で不法就労する
者があり、店頭には、そうや
って稼いだ金で仕入れた商品
が並ぶ。

その中、表紙にNGOの名前が
印刷された数冊のノートが、
平然と売られているのを見
つけた。本来は、NGOが学
校の子供に無償で配っている
もので、ほかでは手に入ら
ない。NGO内部の人間が、
難民に横流しした可能性が
強い。

別のキャンプでは、難民に
配られるコマを売ってもらっ
た。どれも粒が割れたり、欠
けたりした欠品だった。普
通のコメの半分以下の値段の
ものだ。「普通のコメを賣
うといって金を集め、安いコ
メを買って金を浮かせている
んじゃないか」。難民のひとり
はNGOへの不信感をあらわ
にした。

「今の援助は、本当に難民
の将来を考えたものでなく、
自己満足になっているもの
が多い」

3年前からカレン軍に義勇
兵として参加する一方、難民
の自立支援のための作業所を
国境近くの山に作った川村
照次さん（28）は、欧米系NGO

求められる自立促進策

Oを中心とする援助活動に厳
しい視線を送っていた。
川村さんによると、十数年
前、難民の流出が急増し始め
た。支援に熱心だったのは
日本の小規模なNGOだっ
た。しかし、後からやってき
た欧米諸国のNGOの大量の
物資をばらまくようなやり方
に愛想を尽し、撤退してし
まったという。

国際NGOを中心とする支
援活動は、難民化が激しくな
った90年代から行われ
ているが、いまだに食料、医
療など緊急援助のものが中
心で、職業訓練など長期的な
視野に立った活動はほとんど
見られない。

あるカレン兵は「人間、10
年間も食って、裸で生活を
していればおかしなことになるよ」
と嘆いた。

このままでは、難民は人間
の根本的な部分を失はされ
るだけで、祖国に帰還できな
いまま自立できないのでは
ないかと不安になった。

ミヤンマーでは今も民族紛
争が続く。難民流出が止まら
ない。彼らがいつ祖国に帰れ
るのか、めどは立たない。10
月17日、タイ南部のタイヒ
ン・キャンプを視察した時方
向子・国連難民高等弁務官も
「危険と知りながら難民を帰
還させるわけにはいかない」
と苦渋の表情を浮かべた。

取材中、何度も日本の国歌
を歌って聞かせてくれたカレ
ン人の老人に感銘された。
今年9月、日本のNGOで
は唯一、「シャント国際ボ
ランティア会」がタイ北部
のメーサリン・キャンプで活
動を開始した。バンコクのス
ラム街の支援活動で知られ
る団体で、カレン人の民話を
収集し、子供を対象にした本
を作るなどの活動を計画して
いる。

民族の文化、伝統に配慮し
た、このような活動は、欧米
のNGOにはほとんど見られ
ない。小規模であっても、独
自の視座で活動をするNGO
を私たちが支えることが、難
民の自立を促すことにつな
がるのではないかの思いを強く
した。

長期化し援助形がい化

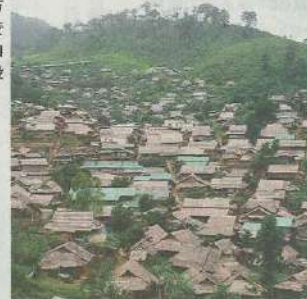
立ち上がり英語の歌を披露する難民の子どもたち＝
タイのワンプン・キャンプ内の学校で10月30日、根
岸基弘写真

2011年7月13日 東京新聞

●戦火を逃れ
川を挟んでミャン
マーと接する国境の町メ
ソトから南へ九十キロ

今年に難民条約60周年。紛争や迫害の絶えない世界で、今なお4300万人もの人々が、異郷での生活を強いられている。タイ西部の山岳地帯では、軍政の弾圧から逃れてきた14万人のミャンマー難民が暮らす。出口が見えない難民問題。国境沿いに点在するキャンプに難民を訪ね、普段の暮らしや望郷の思いを聞いた。(タイ西部ターク県で、杉谷剛、写真も)

タイ西部のミャンマー難民キャンプ



山頂付近の斜面に竹の葉を密着する、タイ西部のフビアン難民キャンプ

帰郷も移住も遠い夢

くねった山道を車で山一さん(右)が避難して頂近くまで上ると、突如として大集落が現れ、沿いの村で農業をしてきた。百十平方キロ、東にミャンマー軍京ドム二二個分のミャンマー軍政が激し、広さのウンティン難民キャンプだ。竹製の供と逃げた。『玉子や相手を山に連れて、農民が大勢死んだ。村七輪で調理する。食料びっしり並んでいた。には戻りたいけど、ビはキャンプ内の雑貨店カラレン人女性ノムシルマ人に占領され、家でも売っているが、収



入がないため、肉や卵はめったに食べない。働き口としてはキャンプ内の小中高校教師や非政府組織(NGO)の手伝い、農作業などがあるが、求人は必ずしもない。外にも自由に出られない。『食事や住居はそれ(ノムシルマ)が二〇〇二年に建てた図書館だ。や楽しみが少ないのが問題』と言っているのはカラレン人のキャンプリーダー、フティさん(左)だ。日本や外国の絵本に、戦火を逃れて一九八四

①カラレン人のノムシルマさんと娘。床や壁に竹を張った小さな家が暮らす
②木の粉を水に溶かした白泥け止め用の「タナカ」を顔に塗った難民キャンプの子供たち



小野さんは語る。『難民を生み続ける根本の構造を変えないと問題は解決しない。多くは帰郷を希望している。世界が協力して紛争や弾圧をなくしていくことが重要だ』

14国境付近に 長期避難、支援は縮小

ミャンマー難民が増加した。タイ州での難民急増を受け、タイ側は10の難民キャンプに現在、計14万人が生きています。ミャンマー側にも多数生じたため、67年国内避難民キャンプが八つあり、2万人が暮らす。国内避難民は40万人ともいわれる。難民条約、第二次大戦後の1951年、欧米は81年に加入。日本

ミャンマー難民キャンプ



●待つばかり
国際NGOが支給する計三百七十人の教師の月給が最近、各七百円(二ツは約一七〇円)から二百円に減額となり、現場に不満が広がっている。図書運賃費も日本やニセツが拠出を中止し、資金繰りのメドが立たない。

年に来てから二十七年が過ぎた。昨年のミャンマー難民キャンプに事態の改善を期待したのが、一戦闘から終わらなかつた。帰郷を断念し、ニセツに減額での定住を申請した。手持ち資金は大人に比べ、子供は元気に遊び回る。彼らの出を中止し、資金繰りのメドが立たない。

2013年6月21日 バンコク週報

バンコク週報

2013年6月29日 - 7月5日

国際交流 12



セレモニーでシャツを贈呈する丸山さん(右)

アジア 万華鏡

第60回

国際連合(UN)が定める「世界難民の日」の6月20日、元Jリーガーの丸山良明さんがタイの北西部ウンピラムにあるミャンマー人難民キャンプを訪れ「サッカー・フェスティバル」が開催された。

丸山さんは、横浜マリノスなどで活躍後、2009年にタイのプレミアリーグ(ATP)のチョンブリFCへ移籍。タイ・ポートFCで12年1月までプレーし、リーグ制覇に貢献した。現在は「Jリーグ・アジアアンバサダー」として、名門パナソニック・クラブFCでアカデミーのコーチと、タ

た。主催者は「シャンティ国際ボランティア会」(SVA)。

丸山さんは、横浜マリノスなどで活躍後、2009年にタイのプレミアリーグ(ATP)のチョンブリFCへ移籍。タイ・ポートFCで12年1月までプレーし、リーグ制覇に貢献した。現在は「Jリーグ・アジアアンバサダー」として、名門パナソニック・クラブFCでアカデミーのコーチと、タ

元Jリーガー、難民キャンプでサッカー交流

1万4000人が暮らす同難民キャンプでのサッカー交流は、昨年のメーラ難民キャンプ(4万5000人)に続いて2回目。引き続きJリーグの協力を仰ぎ、国際交流基金バンク日本センターの資金協力と在タイ日本大使館の後援を得て開催された。

雨交じりの天気の中、カナダに本部を置くスポーツ教育支援のNGO「RIGHT TOPPLAY」とSVAの協力で、サッカーコーチへの指導と8才から10才の子どもたちへのサッカー教室に加え、子どもたちと大人の試合が行われた。

初めて目の前で見る丸山さんの世界レベルのプレーが、難民に感動の与えてくれた一日だった。約400人の観衆が参加した記念イベントでは、UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)とタイ内務省、日本大使館の代表らと舞台上に「子どもたちには、どんな環境でも自分の未来に夢を持って欲しい」というメッセージとともに、Jリーグからユニフォームとボールが贈呈された。

タイ・ミャンマーの国境地帯には9カ所の難民キャンプがあり、約14万人が暮らしている。中には難民キャンプに30年近く暮らしているミャンマー人もいという。ウンピラム難民キャンプで暮らす17才以下の子どもたちは、約半数を占めている。(13年6月現在)



子どもたちを指導

その大半が祖国を知らない難民キャンプ生まれだ。ミャンマーの経済開放・民主化が進む中、いつになるかわからない本国への帰還が大きな課題となっている。

交流会ではSVAが支援する難民キャンプの図書館で丸山さんの経歴がビデオで紹介された。帝京高校・早稲田大学・Jリーグで活躍する丸山さんの姿を子どもたちは、画面に食い入るように真剣に見ていた。

その後、丸山さんが大好きな絵本「小さくても大丈夫」(元ブラジル代表



子どもたちと記念写真

ロバート・カルロスの自伝)の読み聞かせが始まると子どもたちは、完全に絵本の中の新しい世界に引き込まれていた。閉鎖的な難民キャンプで外部の人と触れるチャンスのない子どもたち。丸山さんとのサッカー交流の一日が、子どもたちの生涯の思い出と困難を克服して生きる勇気、希望や夢となることが私たちの願いだ。

(公益社団法人)
シャンティ国際ボランティア会
(SVA)
アジア地域ディレクター
八木沢克昌

2013 年 7 月 15 日 『母のひろば』

★ボランティアのため東南アジアへ

今年一月、国際協力分野の NGO であるシャント国際ボランティア会（SVA）の要請で、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプを訪れた。

目的は、SVA が長年現地で取り組んでいる活動の一環である、絵本・紙芝居出版研修だ。SVA は、二〇〇〇年からミャンマーとタイの国境付近の千里ロにおよぶ地域にある難民キャンプの中で、おもにカレン族の住んでいる七ヶ所に二十一の図書館をつくり、活動をしている。今回、そのひとつ、メラ難民キャンプを訪れた。

★メラ難民キャンプ訪問

タイ・バンコクの空港から、プロペラ機で北西部の国境の街メーソットへ向かい、SVA の事務所を訪れた。ここはまだ難民キャンプの外である。事務所入口には、難民キャンプの悪路で活躍する四輪駆動車がならんでいる。事務所には日本人二人と、十五人ほどのタイ国籍をもつカレンの人が働いていた。

SVA 事務所から、いよいよ難民キャンプに向かう。白樺の林を見ながら一時間ほど走り、難民キャンプの入口に到着した。タイ政府内務省の管理するゲートで検閲を受けサインをする。内務省の許可がないと立ち入りは許されない。中に



難民キャンプの子どもたち

やべ みつ の り 絵本・紙芝居作家

入ると、山の傾斜地に、竹と屋根に大きな葉っぱを重ねて作られた同じようなちいさな高床式の家が密集して建っていた。このメラ難民キャンプには五万人もの人が暮らしているそうだ。

ミャンマーは二〇一〇年十一月の総選挙後、二〇一一年に新政府が発足。六十年以上続いていた政府軍と少数民族の紛争がようやく終わりを迎えようとしているが、また状況は不安定である。

軍事政権から民主化へ流れが変わり、難民の人たちの帰還が大きな問題となっている。「国に帰る選択をする人もいますが、安定して住む家などがない場合もあります。今すぐ帰れるとは思いません。私たちは今、帰るための準備段階です」と、現地の方は語る。

★保育園で紙芝居を上演

難民キャンプ内の図書館調整員の案内で、保育園を訪ねた。竹がたくさん使われた高床式の建物。難民キャンプでは家をはしめ、身の回りのいろいろなものが自然にあるものから作られている。入口に木で手づくりされた三輪の車イスがあり、温いものを感じた。電気のない暗い部屋に入ると、三才から五才くらいの子がいっぱい！ とりの子とからだをくっつけるように座って、こちらをきらきらした瞳で見ている。

私が紙芝居「くらべっ」を演じはじめる時、とってもいい表情で観てくれた。つぎに「おおきく おおきく おおきくなあれ」を演じた。みんなのかけ声でぬくと、ちいさいフタが本当におおきくなっている。大喜び。「おおきいフタたべたあーい」の大喝喝。日本の子どもは、さいこの場面に出てくるケーキを食べたがるが、ここではおおきいフタのほうが人気のようだ。難民キャンプの食料は配給で、米や大豆は食べられるが、肉は買わないと食べられない。ごちそうなのだ。

★家庭がかかえる未来への不安

難民キャンプの家庭も訪ねた。床、壁などが竹で、屋根は大きな葉っぱを重ねた高床式の家。短いハシゴをのぼって家の中に入ると、大きなキリストの印刷物が壁に貼ってある。大きな壁、カラフルなモールなどで室内を飾っている。奥の部屋に蚊帳が吊ってあるのが見えた。台所は、ハシゴで降りた土間にあり、配給される炭と七輪が床に二つ並んでいる。水道やガスはない。犬が竹の床できもちよさそうに眠っていた。難民キャンプの台所で、私の子どもたちの台所を思い出した。

ふつくらしたお母さんに、五才の女の子がくっついていて。小学生の男の子が二人、座ってこちらの様子を見ている。



イラスト／やべみつのり

高校生の女の子が肩かけカバンをかけて帰ってきた。顔にタマリンドの枝を石上ですった、赤い粉をぬったお化粧をしていた。お母さんは、家族が難民になった経緯を話してくれた。「十五年前、住んでいた村がミャンマー軍に襲撃されました。軍の荷物運びに使われましたが、身の危険を感じ逃げてきました。今は、子どもたちの教育のことが一番の心配。民主化した今は、いい教育のために第三国定住（難民受け入れ制度）でオーストラリアへ行くことにしています」。四人の子ともたちは、だまってそれを聞いていた。大人が感じる未来への不安を、敏感に感じ取る子どもたちも多いだろう。

★ボランティアがつくる図書館

難民キャンプの図書館は、竹とユーカリ

リを使い、屋根はチャークという大きな葉を重ねて作られている。室内の明り取りが工夫されていて、電気はないが外光が入り、明るい。子どもの視線に合わせた本棚には、日本で出版された絵本にカレン語とビルマ語の翻訳シールが貼られたものも多い。難民キャンプの作家や画家が作った絵本や紙芝居もある。おり紙などの飾りもあり親しみやすい空間に作られていた。

私はそこで、六カ所の図書館から参加の十二人の図書館員の女性と子どもたちとともに、身近にあるものでおもちゃ作りをさせてもらった。

ベットボトルと竹でラッパ。風船とベットボトルで動く気球。あき缶でうなりゴマを作ったあそび。作ったラッパを「フー」と吹いて大喜び。あき缶で作った「うなりゴマ」の回し方を教えると上手に回し、歓声と拍手がおこる。図書館の入口は、その様子を見る子どもたちがだんだん多くなる。子どもは、どの国の子どもでもないなあと思う。

おもちゃ作りであそんだあと、女の子から絵のプレゼントをいただいた。その絵は、カレン族の民族衣装の男の人は角笛を吹き、女の人はうたっている。女の人の鉢巻にはカレンの旗が描かれている。民族の誇りと、平和への願いが伝わってきた。

★図書館は生きる力を与える場所

SVAは、二〇〇〇年から難民キャンプの中に図書館を作り、図書館活動が難民のカレン族の人たちで運営されるよう支援をつづけている。難民の半数は、キャンプで生まれ育った十二歳以下の子どもたち。図書館ができて、外の世界を知るようになり、図書館が大好きだ。家に帰ると、図書館で覚えたおはなしや歌を家族に聞かせたりするぞうだ。



Atushi Shibuya

さいごに、キャンプにくらす十歳の男子、ボサクレくんのを紹介しよう。

——どうか図書館がぼくのそばからなくなりませんように／ぼくに未来を与えてくれる場所だから／ぼくは世界でいちばん、図書館が好き——

2015年7月22日 朝日新聞



世界発
2015



タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。



タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。

ミャンマー難民ためらう帰還

タイ北西部流入30年

停戦後もなお11万人

タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。

タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。



タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。

見えぬ働き口・地元も定住に抵抗感

タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。

タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。



タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。

金ない 笑うしかない

タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。

タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。



タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。

特派員メモ

タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。

タイ北部に暮らすミャンマー難民の帰還が遠くない。ミャンマー側では政府軍と少数民族勢力の停戦が実現し、受け入れ準備も進むが、難民たちは「帰りたい」といわず、ミャンマー側で生活の再開を望んでいる。

2020年3月4日 東京新聞

2020年03月04日 (水曜日) 東京新聞 D版 00 夕刊外電 3ページ

ミャンマー少数民族



タイ西部の山の斜面に広がるウンビラム難民キャンプ

タイへ脱出「忘れられた難民」

「忘れられた難民」。支援関係者はそう呼ぶ。ミャンマーの内戦や軍事政権時代の弾圧からタイに逃れ、国境地帯にいる、主に少数民族の人たちだ。難民流出は数十年前に始まり、2016年にアウン・サン・スー・チー国家顧問率いる文民政権が成立した後も、山あいに点在する9カ所のキャンプに9万人以上が居住する。難民らは支援の減少に苦しみながら、母国での生活に不安を抱き、帰還をためらう。閉塞感が漂う現場を歩いた。

(バンコク支局・北川成史、写真も)

国境に9万人

支援減でも帰還ためらい

タイ西部メソトから車で約二時間。急な斜面にウンビラム・キャンプが見えた。少数民族カレンを中心に約一万一千人が生活する。竹で壁を組んだ粗末な家が並び、屋根のトタンはさびびが目立つ。簡単な商店もあるが、活気は感じない。

ミャンマー中部バゴー地域出身でカレンのノー・ゲイ・カボウさん(56)は〇六年、国軍によるカレン武装勢力の掃討作戦で村を焼かれ、タイに逃れた。

夫と息子の十六・三十二歳の子ども、キャンプで生まれた孫ら計十二人で、同じバラックに住む。国際機関やNGOが、シリアなどの新たな難民の支援に軸足を移す中、援助の削減に直面している。

支援組織からの米の配給は徐々に減少。昨年、一人あたり月二百バツ(約七百円)ほどのキャンプ内で使える電子マネーの支給が変わった。就労禁止だが、子どもらは近くの村の畑を日給百五十バツ(約

ミャンマーの内戦と難民 民族が多様なミャンマーでは1948年の独立直後から、自治権拡大を求める少数民族と国軍との内戦が始まった。タイの国境地帯には、70年代には難民キャンプが形成されていた。88年、スー・チー氏らの民主化運動が広がった後、当時の軍政による活動家の弾圧も難民流出を引き起こした。現在、ミャンマー政府は少数民族武装勢力と「全土停戦協定」の締結を目指す。署名は約20勢力のうち10にとどまる。



タイ西部で昨年10月、難民キャンプで勉強する少女。学校が存続できるかとも懸念される



五百二十バツ)で手伝い、生計の足にする。

生活に厳しさが増す中でも、母国には帰らないという。「家を焼かれ、財産を失った。孫はミャンマーを知らない」

キャンプの運営を担う自治組織「カレン難民委員会」の男性幹部(56)は「若者の将来が心配でならない」と顔を曇らせる。

キャンプ内には高校や短大もあるが、非公式の教育だ。そうした学校も援助の減少で存続の危機に立つ。

第二国への定住も、最大の受け入れ先だった米国が一三年に募集を締め切り、事実上道を閉ざされた。

国際移住機関(IOM)は一七年、キャンプの一つでの自殺率が、世界平均の三倍以上という報告書を発表した。女性を援助する「カレン・女性機構」のノー・カニョー・ボーさんは「絶望感が薬物やアルコール依存、女性や子どもへの暴力につながっている」と危惧する。

民政移管後もミャンマー国内の情勢は安定しない。西部ラカイン州出身で仏教徒少数民族ラカインのエイ・チョッ・ラーさん(56)は、キャンプで夫(56)、十一・二十歳の子どもの三人と暮らす。義父が民主化運動に関わり、弾圧を恐れて〇七年にタイに

逃れた。

ラカイン州では一七年、イスラム教徒少数民族ロヒンギヤの武装勢力と国軍が衝突。ロヒンギヤ七十七万人以上がバングラデシュに避難した。一八年秋以降、ラカインの武装勢力と国軍の衝突も激化している。

エイ・チョッ・ラーさんは「スー・チー氏は和平対話を強調するけれど、戦闘は続いている。戻るのには難しい」と訴える。

一六年、タイとミャンマー両政府の合意に基づくタイからの自主帰還事業が始まったが、応じたのは計千人程度。ミャンマー国内では帰還者の住宅も建設されているが、課題は多い。

タイに近い東部カレン州レイキョー村には、日本の支援で二百戸が完成している。カレンのソー・ドワイトさん(56)はウンビラム・キャンプにいたが、妻(56)の体調を気に、一八年十一月、暖かい同村に移住した。「妻の体にはいいが、町から離れており、周りに仕事がない」と漏らす。

ミャンマー政府と少数民族武装勢力との不信感は根深く、和平の実現にはまだ時間を要する。

難民支援を続けるNGO「シャント国際ボランティア会」の八木沢克昌さんは「安全な自主的帰還が完了するまで、国際社会はキャンプを見守る必要がある」と指摘する。

執筆：山内乃絵

2014年シャンティ国際ボランティア会に入職。東京事務所勤務後、2018年-2020年「ミャンマー(ビルマ)難民キャンプにおけるコミュニティ図書館事業」の調整員を担当(2018年-2019年タイ国ターク県メーソット駐在)。2021年より同会カンボジア事務所調整員としてカンボジア国バッタンバン州に駐在している。

編集：三宅隆史

1994年シャンティ国際ボランティア会に入職。2000年-2001年に「ミャンマー(ビルマ)難民キャンプにおけるコミュニティ図書館事業」の形成、立ち上げに従事するためタイ国メーホンソン県メーサリアンに駐在した。企画調査室長、事務局次長、アフガニスタン事務所長、タイ事務所能力強化アドバイザー、ネパール事務所長を経て退職。現在立教大学文学部特任教授(社会教育・成人学習論)。シャンティの教育事業アドバイザーを務めている。博士(教育学、上智大学)。

教育と開発 リサーチペーパー No.17

ミャンマー(ビルマ)難民キャンプにおけるコミュニティ図書館事業プロジェクト・ヒストリー

発行日：2023年8月

発行：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会

〒160-0015 東京都新宿区大京町 31 慈母会館 2・3 階

TEL:03-5360-1233 FAX:03-5360-1220

<https://sva.or.jp/>

© シャンティ国際ボランティア会 2023

